

# Ruins of Uto Castle (Nishiokadai) XIII

2015

Kumamoto Prefecture Uto City  
Board of Education

宇土城跡  
(西岡台)  
XIII

宇土市埋蔵文化財調査報告書第35集

二〇一五

熊本県宇土市教育委員会

# 宇土城跡 (西岡台) XIII

— 史跡整備事業に伴う平成21～24年度(第22～25次)発掘調査報告書 —

2015

熊本県宇土市教育委員会

# 宇土城跡（西岡台） XIII

— 史跡整備事業に伴う平成21～24年度(第22～25次)発掘調査報告書 —

2015

熊本県宇土市教育委員会

# 序 文

熊本県宇土市周辺地域には、中世から近世にかけて築城された数多くの城跡が残されており、地域の大切な文化遺産として保存・継承されています。なかでも宇土城跡（西岡台）は、中世における宇土地域の在地領主・宇土氏や名和氏の居城として広く知られており、その規模は県下の中世城跡のなかでも最大級を誇ります。

宇土城跡は昭和54年3月に国の史跡に指定され、56年度より保存整備事業を開始しました。現在、第1ブロック（西岡神宮北側地区）と第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の整備を完了し、平成18年度以降、第3ブロック（三城及び周辺地区）の発掘調査並びに保存整備工事に着手しています。また、整備事業の長期計画にあたる第4ブロック（貝塚地区）・第5ブロック（空堀地区）についても、平成25年度より発掘調査に着手しました。

宇土城跡の曲輪である千畳敷や三城の発掘調査では、多数の掘立柱建物跡や柵列跡、門跡などの城郭関連遺構を検出しました。また、千畳敷を囲む横堀跡が未完成だったことが明らかになりましたが、これは全国各地で実施されている中世城跡の発掘調査でも初めての確認事例として注目を集めました。その他、千畳敷の虎口周辺で石塔を用いた城破り跡を九州で初めて確認するなど極めて重要な成果が得られています。

これらの遺構などから出土した国産の土器・陶磁器や、中国をはじめ朝鮮半島や東南アジアからもたらされた陶磁器などは、往時の宇土城のようすを今に伝える貴重な資料として展示会などで広く公開しています。

以上の調査成果を反映し、当時の歴史環境に基づいた整備を行うため、史跡宇土城跡保存整備検討委員会の協議を経て保存整備事業を進めています。これまで掘立柱建物跡の平面・立体表示や城門及び堀跡の復元、城破りに用いられた石塔の野外展示などの遺構整備、トイレや花木広場などの便益・休養施設の整備を実施しました。

最後になりましたが、発掘調査ならびに保存整備工事にあって御指導・御協力いただきました文化庁記念物課ならびに熊本県教育委員会文化課、保存整備検討委員会の先生方をはじめ、関係各位に心より感謝申し上げます。

平成27年3月

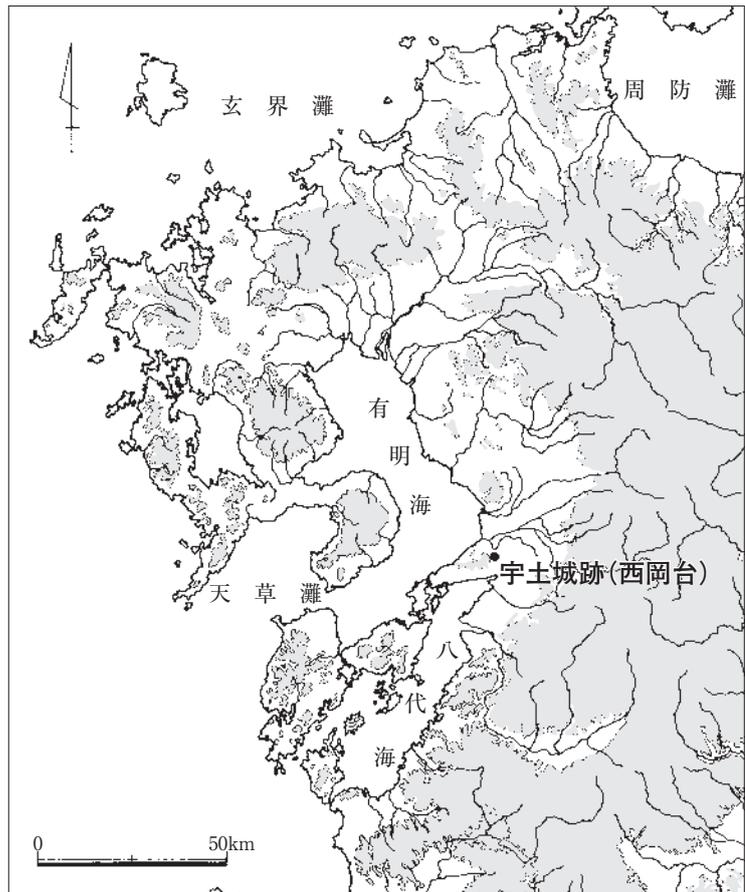
宇土市教育長 浦川 司



#### 宇土城跡（西岡台）の位置

左：1/20,000,000

右：1/2,000,000



## 例 言

- 1 本書は熊本県宇土市神馬町に所在する国指定史跡・宇土城跡（西岡台）平成21～24年度（第22～25次）発掘調査報告書である。当該発掘調査は、史跡宇土城跡保存整備事業（国庫補助事業）に伴い宇土市教育委員会が実施した。
- 2 調査地は宇土市神馬町字三城407に所在する。
- 3 平成21・22年度（第22・23次）は土野雄貴（宇土市教育委員会文化課非常勤職員）、23・24年度（第24・25次）は芥川博士（宇土市教育委員会文化課技師）が発掘調査を担当した。
- 4 発掘調査に伴う遺構実測図は、主に土野・芥川が作成し、境美和・春川香子・山口陽子（宇土市教育委員会文化課非常勤職員）がこれを補助した。
- 5 発掘調査時の写真は土野・芥川が撮影し、遺物写真は藤本貴仁（宇土市教育委員会文化課参事）が撮影した。
- 6 遺物実測図作成及び遺構・遺物実測図の製図は、山口が担当し、藤本がこれを補正した。
- 7 出土遺物観察表は藤本・山口が作成した。また、出土した国産及び貿易陶磁器の産地や製作年代などの所見については、大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館特別学芸顧問）に御指導いただいた。なお、挿図と図版の遺物番号は対応する。
- 8 本書で用いる平面直角座標は世界測地系を使用し、方位は座標軸（世界測地系）を基準とした北をあらわす。また、レベルは標高を示す。
- 9 遺構の標記は、柵列跡：S A、掘立柱建物跡・門跡：S B、土坑：S K、溝状遺構：S D、道路状遺構：S Fと略表記する。
- 10 本書の執筆・編集は藤本が担当した。なお、発掘調査に関する記載内容は土野・芥川の調査所見に基づいている。
- 11 掲載遺物・関連資料は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

## 本文目次

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の組織	2
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 宇土城跡に関する歴史	5
第3節 縄張りとは発掘調査について	11
第3章 平成21年度（第22次）発掘調査	13
第1節 調査の概要	13
第2節 調査区の概要	14
第3節 出土遺物	19
第4章 平成22年度（第23次）発掘調査	21
第1節 調査の概要	21
第2節 調査区の概要	23
第3節 出土遺物	24
第5章 平成23年度（第24次）発掘調査	27
第1節 調査の概要	27
第2節 調査区の概要と検出遺構	28
第3節 出土遺物	31
第6章 平成24年度（第25次）発掘調査	35
第1節 調査の概要	35
第2節 調査区の概要と検出遺構	37
第3節 出土遺物	39
第7章 まとめ	41

## 挿図目次

図1 宇土半島から同基部にかけての中・近世城跡分布図（1/100,000）	6	図12 2303区北端調査状況（1/60）	24
図2 宇土城跡縄張り図（1/3,000）	8	図13 23次調査出土遺物（1/3）	24
図3 千畳敷周辺検出遺構集成図（1/1,000）	9	図14 24次調査区配置図（1/1,000）	27
図4 三城周辺検出遺構集成図（1/1,000）	10	図15 2401区遺構配置図（1/80）	29
図5 22次調査区配置図（1/1,000）	13	図16 2401区及びSD24・25土層断面図（1/60）	30
図6 2201区遺構配置図及び土層断面図（1/60）	14	図17 24次調査出土遺物（1/2,1/3）	31
図7 2202区遺構配置図及び土層断面図（1/60）	15	図18 25次調査区配置図（1/1,000）	35
図8 2203区遺構配置図及び土層断面図（1/60,1/300）	17	図19 2501・2502区遺構配置図（1/100）	36
図9 22次調査出土遺物（1/2,1/3）	18	図20 2502区土層断面図（1/60）	38
図10 23次調査区配置図（1/1,000）	21	図21 2503区平面図及び土層断面図（1/60）	38
図11 2301区・2302区遺構配置図及び土層断面図（1/60,1/100）	22	図22 2504区北壁土層断面図（1/60）	38
		図23 25次調査出土遺物（1/2,1/3）	39
		図24 三城周辺遺構配置図（1/1,000）	41

## 表目次

表1	宇土城跡（西岡台）発掘調査の経過……………	3	表4	23次調査出土遺物観察表……………	25
表2	宇土半島から同基部における主な中世城跡…	7	表5	24次調査出土遺物観察表……………	33
表3	22次調査出土遺物観察表……………	20	表6	25次調査出土遺物観察表……………	40

## 図版目次

図版1	2202区調査前状況（東より）			23次調査出土遺物	
	2201区遺構検出状況（東より）		図版9	2401区調査状況（南西より）	
図版2	2202区遺構検出状況（西より）			2401区調査状況（西より）	
	2202区遺構検出状況（東より）		図版10	S D 24検出状況（南より）	
図版3	2202区南側矢穴痕が残る安山岩（西より）			S D 24検出状況（北より）	
	2203-2区検出1号石垣（南より）			S D 25検出状況（北東より）	
	2203-2区検出1号石垣（北より）		図版11	S D 25土層断面（南西より）	
図版4	2203-2区検出矢穴痕がある石垣石材（西より）			24次調査出土遺物	
	2203-1区調査状況（南より）		図版12	2502区S F 03検出状況（南より）	
	2203-1区検出2号石垣（北より）			2501区S F 03検出状況（南より）	
図版5	22次調査出土遺物		図版13	2501区調査状況（西より）	
図版6	23次調査前状況（東より）			2501区調査状況（北東より）	
	2301・2302区調査状況（南東より）			2501区調査状況（北より）	
図版7	2303区南側調査状況（南東より）		図版14	S A 04検出状況（北より）	
	2303区北側調査状況（南より）			S A 04検出状況（南より）	
	2303区北端検出石垣（北より）		図版15	S A 01検出状況（北より）	
図版8	2302区調査状況（西より）			2503区S F 03検出状況（南より）	
	S K 11調査状況（西より）			2504区調査状況（南より）	
	2301区西側遺構検出状況（南より）		図版16	25次調査出土遺物	

# 第1章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯と経過

昭和49（1974）年1月、宇土市立鶴城中学校の改築移転計画に伴い、その移転用地として宇土城跡<sup>1)</sup>の所在する独立丘陵（通称：西岡台）をあてることが市関係機関の協議で決定した。当地は「宇土城跡（西岡）」として昭和47年12月23日に市の史跡に指定されていたため、宇土市教育委員会が主体となり49年3月から51年3月まで発掘調査を実施した。

調査の結果、古墳時代前期の首長居館を囲む大規模な壕跡、宇土城跡の主郭・千畳敷を圍繞する横堀跡や掘立柱建物跡をはじめとする数多くの遺構を検出し、古墳時代や中世を中心とする多量の遺物が出土した。これを受けて遺跡保存の気運が高まった結果、宇土城跡は恒久的に保存されることとなり、中学校移転計画は中止されて史跡公園として保存する方針が打ち出された。

昭和54（1979）年3月12日の官報告示により、宇土城跡は国史跡に指定され、56年度には保存整備の基本計画である『史跡宇土城跡環境整備計画』を策定し、同年度より保存整備工事に着手した。

本計画では、宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、ブロックごとに遺構表示や休憩施設などの整備方針をまとめた。第1ブロック（西岡神宮北側地区<sup>2)</sup>）では、掘立柱建物跡の遺構表示やベンチ設置（昭和57年度）、東屋建設（58年度）などを行い、平成元年度におおむね整備工事が完了した。

第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）の保存整備に関しては、平成元年度より着手したが、その動きが本格化したのは9年度からである。同年度には、学識経験者や文化庁、県文化課担当職員などで構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会（以下、委員会）が発足し、委員会の指導・助言のもと、宇土城跡の調査成果や歴史的背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備を現在まで進めている。

また、第2ブロックの整備にあたり、『史跡宇土城跡環境整備計画』の内容を見直す必要が生じたため、委員会で協議を重ね、平成10年度に主として第2ブロックの整備方針を定めた『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』を策定した。

第2ブロックの主な整備施設を列举すれば、千畳敷を圍繞する横堀の復元（9・10・13・15・17年度）、16・17号建物跡の遺構表示（11年度）、東屋として休憩施設を兼ねた19号建物跡の整備（12年度）、トイレ建設（14年度）、案内サインの設置（15年度）、城門や柵の復元整備（17年度）などで、17年度に同地区の整備をおおむね完了した。

また、平成19年度からは第3ブロック（三城及び周辺地区）の保存整備工事に着手するとともに、委員会の指導・助言のもと、20年度には第3ブロックを中心とする基本計画書を策定した。第3ブロックについては、北側や南側に民家が近接することから、当初の3ヵ年度（19～21年度）は雨水排水処理などの防災的な工事を優先的に実施した。22年度より三城において遺構表示などの整備工事を開始し、掘立柱建物跡（22・23年度）、導水状遺構や土塁跡の整備（23年度）などの遺構の整備工事を実施したほか、解説サインの設置（22・23・25年度）のほか、三城及び周辺の植栽（張芝）を行った。なお、第4・5ブロックの整備は、全体計画（短期・中期・長期）のなかで長期計画に位置づけられており、26年度には当地区に繁茂する竹を中心に樹木伐採を行った。28年度以降、年次計画に基づき保存整備工事を行う予定である。

上述した本城跡の保存整備を目的として発掘調査を開始したのは、平成2年度に千畳敷で実施した第

4次調査からである。現在まではほぼ毎年調査を行っており、千畳敷において多数の掘立柱建物跡を検出したほか、虎口や城門跡、横堀跡、竪堀跡の発掘調査を実施した。これらの調査によって、千畳敷の横堀跡が未完成であったことや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られている。その内容については、報道機関への発表や現地説明会の開催、発掘調査報告書の刊行、宇土市立図書館郷土資料室における出土品の展示などを通じて一般に公開している。なお、平成18年度より保存整備に伴う発掘調査時に体験発掘や城跡ウォーキングを毎年1回実施しており、宇土城跡を広く周知する取組みもあわせて展開している。

本書は、これまで実施した計27次にわたる発掘調査（平成26年度現在）のうち、史跡宇土城跡保存整備事業に伴い平成21～24年度に実施した第22～25次発掘調査の報告書である。なお、当該調査は、史跡整備に伴う発掘調査であることから、表面検出を基本とし、遺構埋土の掘削は遺構保護の観点から極力おさえることとした。

## 第2節 調査の組織（敬称略、役職名は当時）

### －発掘調査（第22～25次）及び1次整理作業（洗浄・注記・接合）－（平成21～24年度）

調査主体 宇土市教育委員会

調査責任者 木下博信

調査事務局 教育部長 山内清人（21年度）、高木恭二（22年度）、山本桂樹（23・24年度）

文化課長 高木恭二（21年度）、坂本純至（22～24年度）

文化財係（組織改編に伴い24年度より文化係）

松下敏親（課長補佐兼係長：21年度）、中園静子（主幹兼係長：22年度）、松田安代（主幹兼係長：23年度）、船田元司（課長補佐兼係長：24年度）、湯野良子（参事：21・22年度）、藤本貴仁（参事：22～24年度）、宮崎幸樹（主事：21・22年度）、平田陸美（主事：23・24年度）、士野雄貴（非常勤職員：21・22年 ※発掘調査・1次整理作業担当）、芥川博士（技師：23・24年度 ※発掘調査・1次整理作業担当）

#### 発掘調査作業員

安達求・石上春代・内田博美・奥村美栄子・小畑律子・河野充矢・木村博敏・境泰司・下村政博・高橋勝利・田中国義・中川道治・中村洋・西村和子・橋本カズエ・橋本チエ子・福田フミエ・藤浦義磨・古山節子・村山艶子・山田カツエ（社団法人宇土市シルバー人材センター）

#### 1次整理作業員

境美和・春川香子・山口陽子（文化課非常勤職員）

### －2次整理作業（実測・トレース）・報告書作成－（平成26年度）

責任者 教育部長 木下博信、浦川 司（後任）

事務局 教育部長 前田保幸

文化課長 木下洋介

文化係 赤澤憲治（主幹兼係長）、宮邊幸子（参事）、藤本貴仁（参事 ※2次整理作業・報告書作成担当）、九谷景子（参事）、芥川博士（技師）

表1 宇土城跡（西岡台）発掘調査の経過（アミ部分は今回報告）

年度	回数	調査地点	主な検出遺構	特記事項
昭和49・50年度	1次	千畳敷周辺、三城周辺ほか	壕跡（古墳時代）、横堀跡・溝跡・掘立柱建物跡・柵跡・門跡・土坑墓・道路状遺構（中世）	市立鶴城中学校移転計画に伴う発掘調査。古墳時代の首長居館と中世城跡の重複を確認。古墳時代首長居館の確認は全国で2番目。調査成果を受けて中学校の移転中止。
51年度				『宇土城跡（西岡台）』本文編・史料編刊行。
62年度	2次	三城周辺	柵跡・溝跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ刊行。
63年度	3次	三城周辺	掘立柱建物跡（中世）	遺跡状況把握のための発掘調査。
平成2年度	4次	千畳敷北東側、同東側登道	掘立柱建物跡・溝跡（中世）	保存整備に伴う発掘調査開始。以後継続する7次までの千畳敷の調査で、重複する多数の掘立柱建物跡を検出。
3年度	5次	千畳敷南側	掘立柱建物跡・虎口跡（中世）	千畳敷において、平面プラン「Lの字形」の切通し状を呈する虎口を確認。
4年度	6次	千畳敷北西側、同南西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、掘立柱建物跡（中世）	
5年度	7次	千畳敷西側、同東側及び北側帯曲輪	横堀跡・溝跡（中世）	虎口前面の横堀跡から大量の石塔残欠出土。
6年度	8次	千畳敷東側、同西側及び東側帯曲輪	虎口跡	
9年度	9次	千畳敷南側平場、同西側帯曲輪	壕跡（古墳時代）、堀跡（中世）	千畳敷及び周辺地区の遺構表示開始。
10年度	10次	千畳敷北側帯曲輪	横堀跡・開渠状遺構・竪堀跡（中世）	千畳敷北側横堀跡で小間割（掘削単位）確認。掘削途中で中止されたことが遺構の状態や埋土の堆積状況から判明。掘削途中の中世城の堀跡が確認されたのは全国初。宇土城跡で初めて鉄砲玉出土。竪堀跡を初めて検出。
11年度	11次	千畳敷東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ刊行。
12年度	12次	千畳敷東側帯曲輪	竪堀跡・虎口跡・門跡（中世）	千畳敷の虎口路面は、地山掘削面をそのまま路面とするⅠ期と盛土整地上面とするⅡ期の2時期存在したことが判明。Ⅱ期に伴う門跡を確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ刊行。
13年度	13次	三城南側平場	溝跡（近世以降?）	史跡指定地に隣接する個人住宅建設に伴う発掘調査。
	14次	千畳敷北東側、同南東側帯曲輪	壕跡・方形張出し（古墳時代）、横堀跡（中世）	虎口前面の堀から多量の石塔残欠出土。これを意図的に地山土を多量に含んだ土砂で虎口周辺の堀を埋めていることが判明。5・12次調査の成果をあわせ、虎口周辺で行われた城破りと考えられる。石塔を用いた城破りを九州では初めて確認。また、1次調査で確認された千畳敷南東側の張出しと同規模・同形態の張出しを同南東側で確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅴ刊行。
14年度	15次	千畳敷北東側、同南側帯曲輪	壕跡（古墳時代）・竪堀跡（中世）	古墳時代の首長居館の規模をほぼ確定。千畳敷北東側の竪堀跡が丘陵裾部まで延びる可能性高まる。『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ刊行。
15年度	16次	千畳敷北側、同南東側、南西側帯曲輪	竪堀跡・横堀跡（外堀）（中世）	10次調査で検出した竪堀は千畳敷北側に向かって延びることが判明。同北東側の竪堀の規模・深さをトレンチ調査で確認。『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ刊行。
16年度	17次	千畳敷北西側帯曲輪	竪堀跡（中世）	千畳敷北西側で大規模な竪堀跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ刊行。
17年度	18次	千畳敷南側平場、同東側帯曲輪	横堀跡・竪堀跡（中世）	千畳敷東側で竪堀跡を検出。
18年度	19次	三城南側帯曲輪、同南東側帯曲輪	道路状遺構・溝跡（中世）	三城南東側で側溝を伴う道路状遺構、同東側平場で三城から段下の帯曲輪へ続く溝跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ刊行。
19年度	20次	三城南西側帯曲輪	ピット（中世）	
20年度	21次	三城東側帯曲輪	掘立柱建物跡（中世）	三城東側に隣接する帯曲輪で掘立柱建物跡を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ刊行。
21年度	22次	三城北側帯曲輪	ピット（中世?）	
22年度	23次	三城北西側帯曲輪	土坑（中世?）	21～23次調査の結果、三城直下の帯曲輪は東側が遺構密度が高く、西側に向かって希薄になることが判明。
23年度	24次	三城東側帯曲輪	堀状遺構（中世）	北東方向に延びる堀状遺構を検出。『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ刊行。
24年度	25次	三城南東側帯曲輪	道路状遺構・柵列跡（中世）	1次・19次調査で検出した道路状遺構を確認。『国指定史跡宇土城跡（西岡台）－第2ブロック（千畳敷及び周辺地区）保存整備工事報告書－』を刊行。
25年度	26次	「カラホリ」南端部	横堀跡（中世）	「カラホリ」と呼称される城跡西側の大規模な横堀跡の調査に着手。『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ刊行。
26年度	27次	「カラホリ」南端部及び北端部	横堀跡（中世）	「カラホリ」北端部において現地表より2m余りの深さで堀底を検出。『宇土城跡（西岡台）』ⅩⅢ刊行。

## 2次整理・報告書作成作業員

山口陽子・廣瀬恵子（文化課非常勤職員）

### 一史跡宇土城跡保存整備検討委員会一

平成21～24年度 北野隆（委員長，熊本大学名誉教授〔工学博士〕），千田嘉博（奈良大学文学部文化財学科教授），稲葉継陽（熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授）

平成26年度 北野隆，稲葉継陽，鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹），山尾敏孝（熊本大学大学院自然科学研究科教授），田中尚人（熊本大学政策創造研究教育センター准教授），田代周史（熊本県立第一高等学校教諭），丸目公一（西岡神宮宮司），城本和博（轟地区振興会会長）

### 一調査指導及び協力者一

市原富士夫・青木達司・山下信一郎（文化庁記念物課），大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館），丸山伸治・坂井田端志郎・能登原孝道・木庭真由子・福田匡朗（熊本県教育委員会），中山圭（天草市教育委員会），濱口俊夫・吉田恒・根本なつめ・辻誠也・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会）

### 註

- 1) 西岡台の東約500mには，キリシタン大名・小西行長が築城した近世宇土城跡（城山）が所在していることから，通常，中世の宇土城跡は「宇土城跡（西岡台）」や「宇土古城」などと呼ばれている。本書では特別のことわりが無い限り，「宇土城跡」とは「中世の宇土城跡」を指すものとする。
- 2) 『史跡宇土城跡環境整備計画』では，第1～5ブロックそれぞれにおいて具体的な地区名称を設定していなかったが，平成10年度策定『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』において，ブロックごとに地区名称を付したことから，本書ではカッコ書きで当該名称を示すこととする。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境（図1）

熊本県宇土市は、県沿岸部のほぼ中央から西に向かって突出する宇土半島の北側から基部にかけて位置する。市域は東西約24.8km、南北約7.6km、面積約74.20㎡である。

宇土半島は北に有明海、南に八代海と面し、半島先端には天草諸島が連なる。半島内は山がちで、平地の割合は少ない。半島を構成する山地は、主峰の大岳（477.6m）を中心とする大岳火山系山地と三角岳火山系山地とに分けられる。また、半島基部には若干の平地を挟んで木原山（雁回山、314.4m）が存在する。周辺の基盤となる地質は、安山岩類や凝灰角礫岩などの大岳由来の火山岩類が主である。

市の北側には、熊本県三大河川の一つである緑川と、その支流である浜戸川が東西に流れており、流域には両河川によって形成された沖積平野が広がっている。宇土半島基部では、東西から迫る山塊によって平野が狭まり、南の八代平野に抜ける道に限られることや緑川の河口に近いことなどから、宇土半島基部は古来より陸上・海上ともに交通の要衝であった。

宇土城跡は、この沖積平野南西部の通称「西岡台」と呼ばれる独立丘陵（標高約40m、東西約750m、南北約400m）を利用して築かれている。周辺には、縄文時代から歴史時代まで数多くの遺跡が分布しているが、これらについては、これまで刊行した宇土城跡に関する調査報告書に記載しているため本書では割愛する。

### 第2節 宇土城跡に関する歴史（図1，表2）

宇土城跡は中世宇土に拠点を置いた在地領主の宇土氏・名和氏の居城である。「三宮社記録」によれば、永正3（1048）年に築城され、以後、菊池氏の一族が相次いで宇土城にいるとの伝承があるが、それを具体的に証明する同時代の文献や考古学的根拠は残されていない。一方、廃絶時期は小西行長が宇土城主になった翌年、近世宇土城跡（城山）の工事に着手した天正17（1589）年から関ヶ原の戦いで敗死した慶長5（1600）年の間と推察され、発掘調査で出土した陶磁器の年代もほぼ対応している。

宇土氏は肥後国守護菊池氏の一族とされる在地領主で、宇土を本拠として宇土郡一帯を知行しており、宇土庄の根本領主ないし庄官に出自を持つと考えられる。宇土氏が史料上に初めて現れるのは、元徳2（1330）年6月5日の鎮西下知状で、宇土高俊が登場する。高俊は宇土庄を本拠とし、正平3（1348）年、征西將軍懐良親王を宇土津に迎え入れており、南朝方として活動した人物であった。明和元（1390）年から翌年にかけて、九州探題の今川了俊は、肥後国南部の南朝方勢力に総攻撃をかけ、宇土城は了俊の攻撃によって落城したが、宇土氏自身は了俊に降参、それによって本領の宇土を安堵された。

南北朝の合一後も引き続き本拠を維持したとみられるが、高俊以後、宇土氏に関する文献資料は宇土為光が登場する文明4（1472）年まで途絶え、その間の系譜については明らかではない。為光は菊池氏全盛期の肥後・筑後守護であった持朝の子で、宇土忠豊の養子となって宇土氏の家督を継承した人物である。文亀元（1501）年の菊池氏直轄領家臣団の内紛に伴って失脚した菊池能運に変わり、為光は3年にわたり守護の地位にあったが、文亀3（1503）年、相良氏や阿蘇氏らの協力を得た能運は、為光とその子重光、嫡孫の宮満丸を殺害、これによって宇土氏は滅亡し、能運は肥後国守護として復活したのである。



図1 宇土半島から同基部にかけての中・近世城跡分布図 (1/100,000)

一方、名和氏は代々伯耆国長田邑（鳥取県西部）を領した有力武家である。名和氏と肥後国との関わりは、鎌倉幕府滅亡の際の勲功の賞として、名和義高へ八代庄が与えられたことに始まるが、名和氏の一族が本国での劣勢を背景に八代に移住するのは1350年代末頃である。正平13（延文3、1358）年には、義高の甥である名和顕興（名和長年の孫）は、この地に一族を伴って移ったとされ、南朝方として活動した。以後、八代を中心として南北に勢力をおよぼしたが、文亀4（1504）年、名和顕忠は本拠地である古麓城（八代市古麓町）を菊池氏や相良氏によって追われ、宇土と至近距離にある守富庄の木原城（熊本市南区富合町）に移り、その後、宇土氏滅亡後の宇土城に入った。顕忠が宇土城に入ることができた背景には、直前まで宇土を支配していた宇土為光の娘婿であった顕忠が、領主を失った宇土の土豪や領民に受け入れられやすい存在であったとみられている。

名和氏が宇土城に入った後も相良氏との間に争いは絶えず、相良領と名和領の境目である豊福領（宇城市松橋町）をめぐる幾度となく争ったことが、相良氏八代支配時代の記録史料である『八代日記』から知ることができる。豊福領の帰属は、長享元（1487）年から永禄8（1565）年まで、80年足らずの間に名和氏と相良氏との間で9回も入れ替わっており、その攻防の激しさがうかがえる。豊福の位置は、名和氏の宇土、阿蘇氏の益城、相良氏の八代と3つの郡の境目に位置し、また甲佐と宇土半島を結ぶ道と八代から隈本へ向かう薩摩街道とが交錯する場所でもあり、軍事・交通の要所だったことがその争いの背景とみられる。

また、『八代日記』によれば、長く阿蘇氏の所領となっていた宇土半島郡浦庄に位置する網田（宇土市）と郡浦（宇城市三角町）の領有権が、天文19（1550）年に阿蘇惟忠から名和行興に割譲されるなどしたが、基本的には本地域は戦国末期まで阿蘇大宮司の支配が継続していた。

名和氏に関する文献史料や石塔の銘文などが示すその領域支配は、郡浦庄を除く宇土郡、益城郡や八

表2 宇土半島から同基部における主な中世城跡

名称	所在地	標高 (m)	主郭規模 (m) (長軸×短軸)	主な遺構	出土遺物	備考
阿高城跡	熊本市南区城南町	88	95×16	堀切・堅堀・土橋・溝状遺構・集積遺構	土師器皿	1995年、旧城南町教委による発掘調査。
木原城跡	熊本市南区富合町	140	30×13	帯曲輪・堅堀・土橋	青磁・播鉢（瓦質土器?）	主郭西側に幅10m、南北38mの曲輪。主郭北側の「小城」にも東西32m、南北14mの曲輪。
高城跡	宇土市松山町	95	14×10	帯曲輪・土塁・堅堀	—	「コタカジョウ」と呼ばれる尾根西側に畝状堅堀群とみられる連続する堅堀。
宇土城跡 (西岡台)	宇土市神馬町	39	65×50	横堀・堅堀・掘立柱建物跡・門跡・土橋・柵列・道路状遺構	土師質土器、瓦質土器、中国製陶磁器(青磁・染付など)	主郭「千畳敷」西側に東西65m、南北35mの曲輪「三城」が位置。その西側に「カラホリ」と呼ばれる大規模な横堀。
白山城跡	宇土市神合町	218	60×40	帯曲輪・堀切・土橋	—	城跡南東麓の神山地区に、白山神社（名和行興建立）と光園寺跡毘沙門堂が位置。
田平城跡 (網田城跡)	宇土市上網田町	20	210×105	横堀・土塁・堀切・土橋	瓦質土器(播鉢・火鉢)、中国製染付、丸形弾丸石製鋳型	古墳（城1・2号墳）を土塁として利用。
大岳城跡	宇土市上網田町	477	—	土塁状遺構・帯曲輪状遺構	—	宇土半島最高峰の大岳頂上に位置。頂上部に東西95m、南北40mの緩斜面有り。
雄岳城跡	宇土市下網田町	348	47×17	堅堀・帯曲輪	—	下網田町雄嶽の通称「ジョウビラ」に位置。
矢崎城跡	宇城市三角町	23	80×50	帯曲輪・堀切	—	城地西側の浦には「船津」地名が残る。
群浦城跡	宇城市三角町	79	70×22	帯曲輪・横堀・土塁	—	主郭南西部先端にも連続した横堀が存在した可能性が高い。



図2 宇土城跡縄張り図 (1/3,000, 1974年測量図などを参考に作成)

代郡の一部地域（木原や豊福）に限られていたといえよう。これらの地域には、名和氏時代に存在したとみられる田平城（網田城，宇土市上網田町）・阿高城（熊本市南区城南町）・矢崎城（宇城市三角町）などの中世城跡が残されている。

天正15（1587）年，豊臣秀吉の九州平定によって名和顕孝は宇土城を開城した。その後，顕孝は筑前小早川隆景のもとに替地を命じられ，肥後との関係が断たれた。

顕孝による宇土城開城の翌年，小西行長は肥後南半（益城・宇土・八代の三郡）14万6千石の領主として宇土城に入ったが，翌年には隣接する台地上において新城の築城（近世宇土城跡）に着手し，間もなく西岡台の宇土城は廃城となったとみられる。朝鮮出兵後，行長は慶長5（1600）年の関ヶ原の戦い



図3 千畳敷周辺検出遺構集成図（1/1,000）

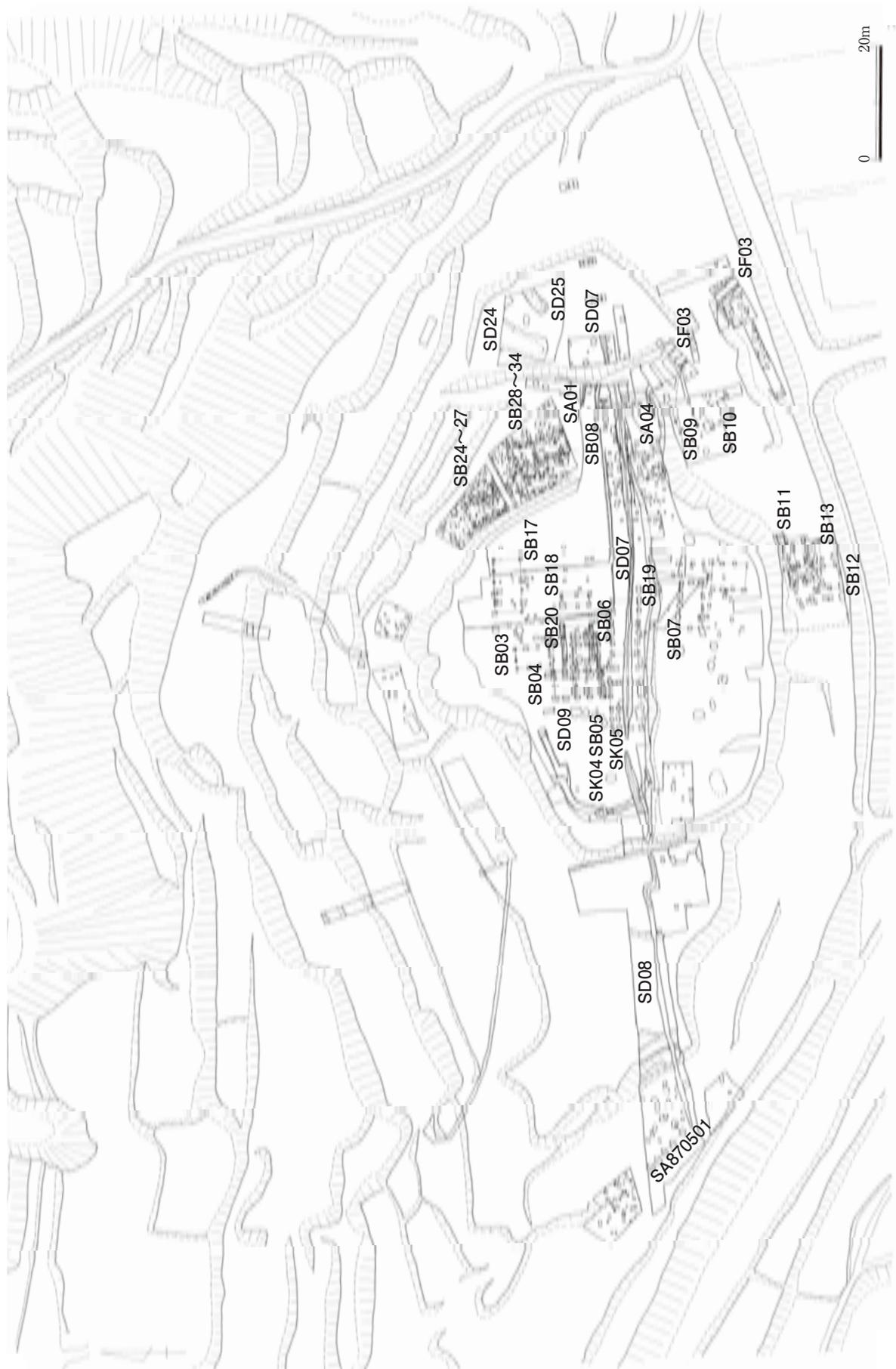


図4 三城周辺検出遺構集成図 (1/1,000)

に伴って刑死したが、近世宇土城は加藤清正によって領有・改修された。本丸や堀跡の発掘調査で、城破りに伴うとみられる故意に破壊された石垣や門跡を検出し、大量の瓦や貿易陶磁器が出土している。

### 第3節 縄張りとは発掘調査について（図2～4）

宇土城跡の主な曲輪は、西岡台丘陵の東西に並んだ二つの高位部に所在する。

東側が「千畳敷」と呼ばれる曲輪で、その規模や城郭遺構の密度などから当該曲輪は主郭に位置づけられている。標高約37m、東西約50m、南北約65mの規模を有しており、その周囲を横堀（約234m）が囲繞している。曲輪やその周辺から、発掘調査によって多くの掘立柱建物跡・門跡・柵列跡・虎口跡・横堀跡・竪堀跡を検出した。

一方、西側の曲輪は「三城」と呼ばれ、標高約39m、東西約65m、南北約35mの規模を有する曲輪であるが、千畳敷のように曲輪を囲繞する横堀は存在しない。発掘調査により掘立柱建物跡・門跡・道跡、溝跡を検出した。これらの曲輪は、周囲に土地を削り出して急峻な崖状地形や帯曲輪を造り出して防御性を高めている。

千畳敷や三城周辺の発掘調査によって、大量の土師質土器や播鉢・火鉢などの瓦質土器、備前焼・瀬戸焼などの国産陶器、中国製の白磁・青磁・染付や華南三彩、タイや朝鮮半島製の陶磁器など、13～16世紀代を中心とする遺物が出土した。

三城の西側約50mには、地元で「カラホリ」と呼ばれている大規模な横堀跡が南北方向に配置されている。規模は長さ約310m、幅約10～15m、深さ約5～7mで、その西側に平行して高さ約2mの土塁がある。この横堀跡は、堀底に側溝を有し、南端付近から門礎とみられる巨石が出土していること、中世以来の古道である三角道と交わることから、平時には堀底道として機能していたと推測される。現在のカラホリは道路で途切れているように見えるが、現地踏査の結果や昭和49年の地形図から判断すると、現在より南へ100m程度延びていたと推定され、カラホリ東側の防御を考慮しての造作とみられる。

カラホリが三城付近だけでなく、西岡台南麓まで延びているのは注意すべきことであり、特定の曲輪に限らず城全体を意識した堀の配置は、いわゆる「惣構え」の考え方に通じるものといえよう。カラホリの東側には陳の前遺跡（弥生時代～中世）があり、宇土城に関連した遺跡と推定される。おそらく神馬町字西岡、同字日平、同字馬場下、石橋町字陳の前周辺に、領主や家臣団の居住域が形成されていたとみてよいだろう。

千畳敷や三城で検出した建物跡は全て掘立柱建物跡であり、礎石建物跡は発見されていない。また、2間×数間程度の建物が多数を占めており、小規模かつ等質的で瓦もほとんど出土していない。このことから、領主の屋敷が曲輪内に存在したとは考え難いことから、名和氏の居館は丘陵南側に存在したとみられる家臣団の屋敷群と隣接して築かれていたと想定される。

#### 引用・参考文献

- 阿蘇品保夫 1977「肥後における名和氏と宇土氏」『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集 宇土市教育委員会
- 稲葉継陽 2007「戦国期の城と地域社会」『新宇土市史』通史編第2巻 中世・近世 宇土市
- 宇土市史編纂委員会編 2002『新宇土市史』資料編第2巻 宇土市
- 2003『新宇土市史』通史編第1巻 宇土市

- 宇土市教育委員会 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集  
1981『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅰ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集  
1982『宇土城跡（城山）』宇土城跡城山調査概報Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第7集  
1985『宇土城跡（城山）』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集  
1985『西岡台貝塚』 宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集  
1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集  
2001「石ノ瀬遺跡」『新宇土市史基礎資料』第9集  
2003『宇土城跡（西岡台）』Ⅵ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第24集  
2004『宇土城跡（西岡台）』Ⅶ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第25集  
2005『宇土城跡（西岡台）』Ⅷ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第26集  
2007『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集  
2009『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集  
2012『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集  
2014『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 宇土城跡三ノ丸跡発掘調査団 1982『宇土城跡三ノ丸跡』弥生時代前期のV字溝と近世城郭遺構の調査  
鶴嶋俊彦 2013「宇土名和領の中世城」『うと学研究』第34号 宇土市教育委員会

## 第3章 平成21年度（第22次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図5）

第22次調査は、平成21（2009）年10月から翌年1月にかけて実施し、三城北側の帯曲輪を中心に計3地点で発掘調査を行った。調査面積は計158㎡で、内訳は2201区：33㎡、2202区：80㎡、2203区：45㎡である。

21次調査に引き続き、22次調査は三城周辺の帯曲輪の遺構確認を主目的とした調査である。21次調査では、三城東側帯曲輪を対象地として発掘調査を実施した。264㎡という比較的限られた面積の調査であったが、果樹の植え込み跡とみられる掘り込みによって調査区全面に攪乱を受けていたものの、掘立柱建物跡を12棟（SB24～SB35）検出した。これらの多くは重複しており、計7時期にわたり建物が存在したことが明らかとなった。このことから、同地において恒常的に建物が立地していたと考えられる。

一方、22次調査では、2区で掘立柱建物跡の可能性のある遺構を検出したほか、1区においてピット群を検出したが、三城東側帯曲輪と比較して遺構密度が非常に低く、住居や倉庫などの構造物を配置する空間として重点的に利用された痕跡は確認できなかった。

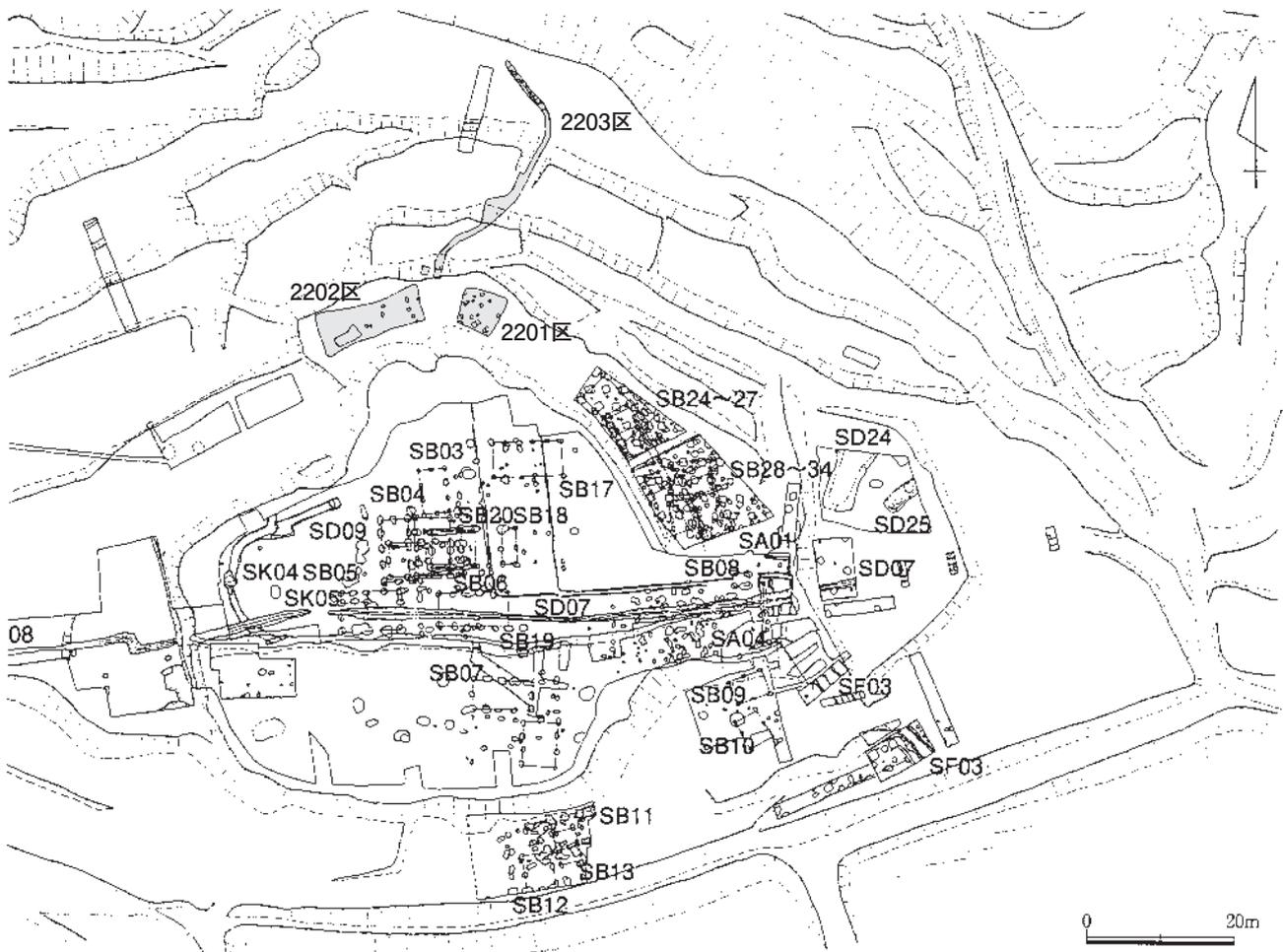


図5 22次調査区配置図（1/1,000，アミ部分：22次調査区）

以上の調査の結果、遺構埋土や遺構外より土師質土器（坏・皿・碗）や須恵器（甕）、瓦質土器（捏鉢・播鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、基石状石製品などが出土した。なお、後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

## （2）調査日誌抄

平成21（2009）年	状況, 2203-2区遺構検出状況)
10月28日 重機による表土除去開始。2203-2区平坦面で石垣検出（1号石垣）	12月1日 2201区において整地層確認。
29日 グリッド杭設置	2日 2202区にて遺構検出。
11月2日 2203-1区斜面部より2号石垣検出。	7日 2号石垣の確認のため、2203-1区を拡張。
3日 第4回体験発掘を実施（参加者34名）。	8日 調査区写真撮影。
4日 2201区包含層掘削開始。	14日 遺構実測作業開始。
16日 2203-3区平坦面より遺構を検出。	17日 調査器材搬出。
25日 2201区で遺構を検出。写真撮影（1号石垣検出	平成22（2010）年
	1月15日 実測作業終了。

## 第2節 調査区の概要

### 2201区（図6，図版1）

三城北側直下に位置する帯曲輪に設定した調査区であり、21次調査区の北西約20mの距離にある。22

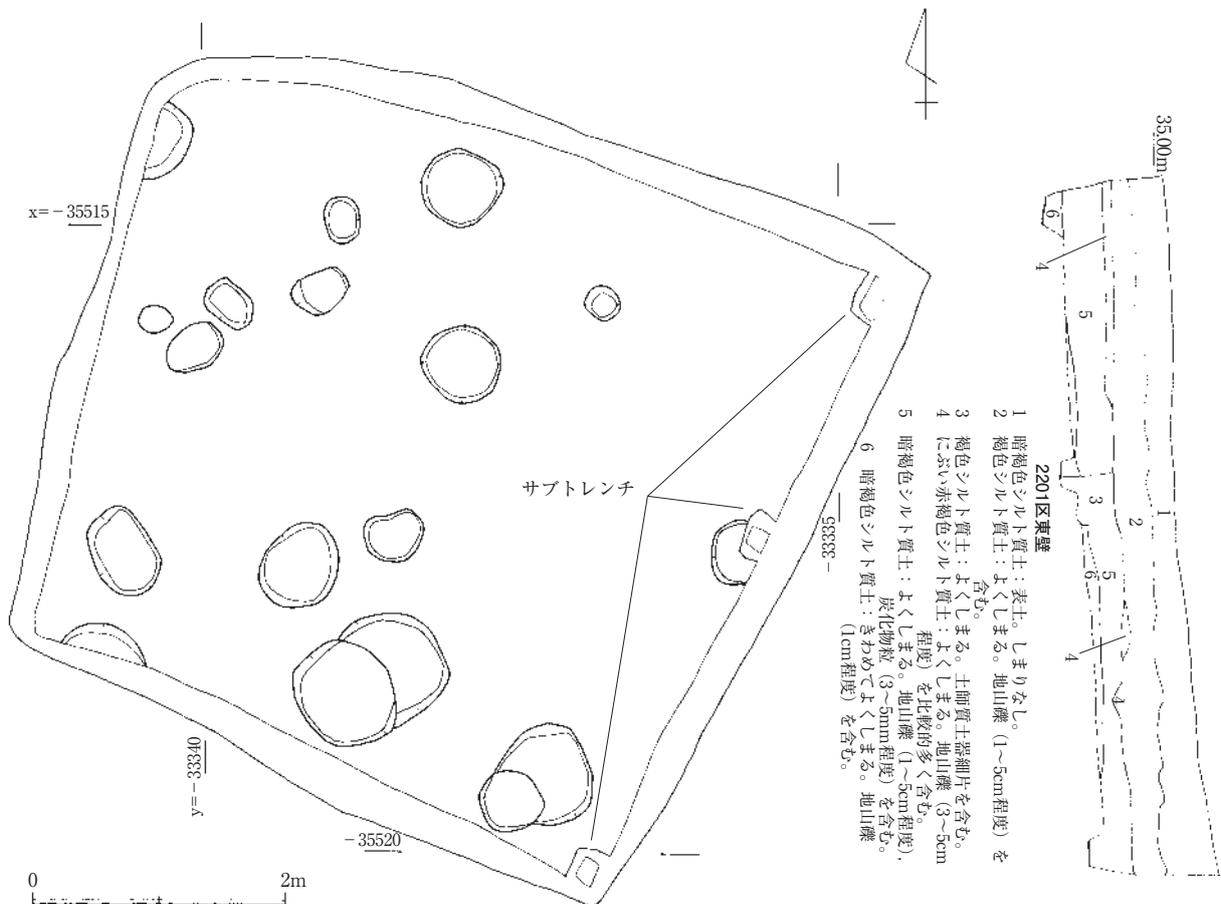


図6 2201区遺構配置図及び土層断面図（1/60）

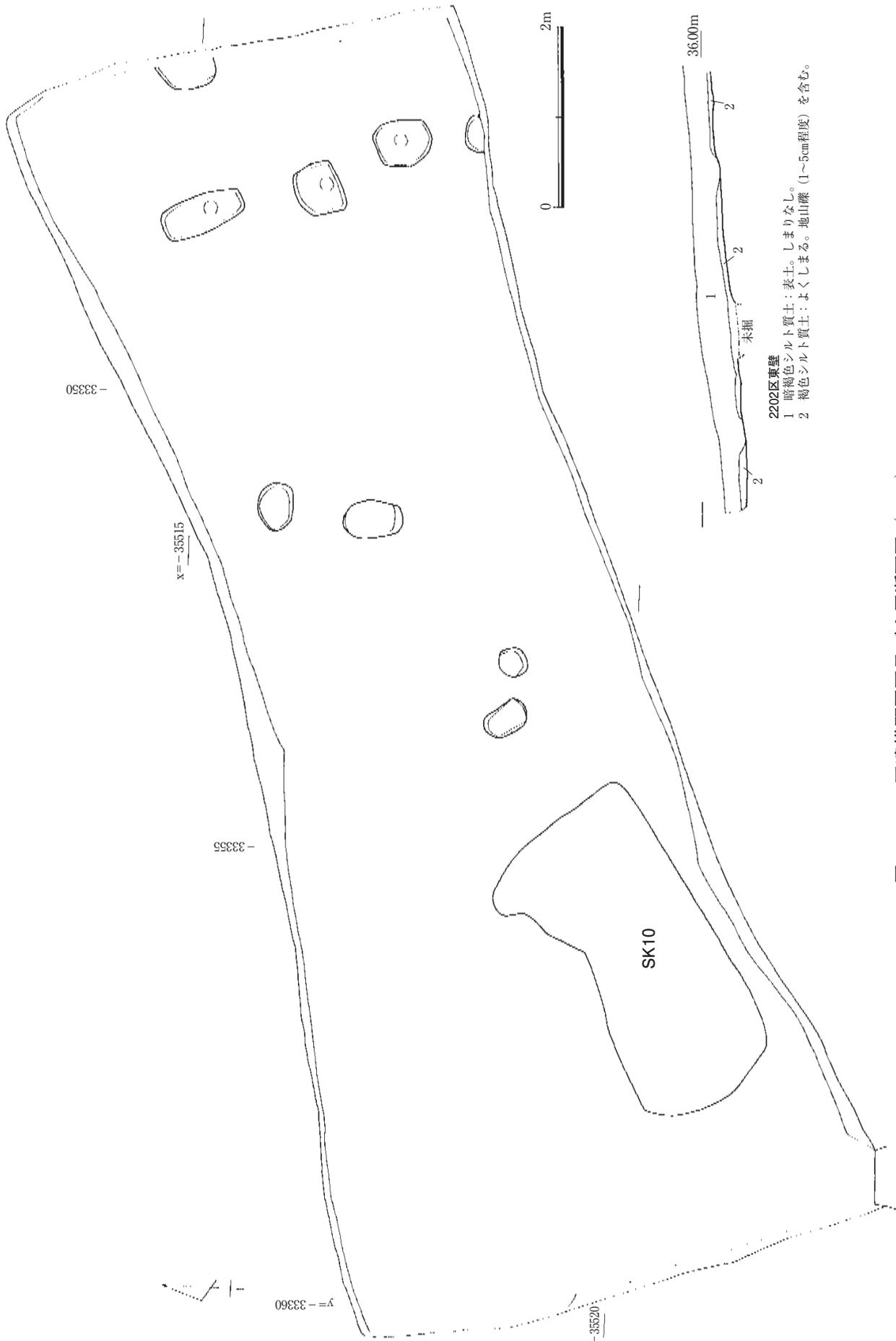


図7 2202区遺構配置図及び土層断面図（1/60）

次調査において最も層序の遺存状況が良好だったのは本調査区である。重機により表土を除去し、遺物包含層を人力で掘り下げ後、遺構検出作業を行った。

その結果、整地層の可能性のある硬化層を2層確認したが、下層の硬化層は部分的であった。また、散在的に広がるピットを18基検出したが、うち6基が樹痕とみられ、調査区内において掘立柱建物跡や柵列跡などの遺構は確認することができなかった。これらのピット群の大半は、下層の硬化層上面及び地山面から検出した。

表土層や遺物包含層より、土師質土器の坏・皿、瓦質土器（須恵質）の鉢、中国製青磁碗・皿、中国製白磁皿、基石状石製品（灰白色・灰黒色）などが出土した。

### 2202区（図7，図版1～3）

2201区西隣に設定した調査区である。2201区とは対照的に表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、現況グラウンドレベルより約15cm下で地山面に達するが、これは調査区の大部分が近現代の耕作に伴い削平されたためと考えられる。

調査の結果、ピット状遺構9基（うち4基は樹痕とみられる）、土坑状遺構SK10を1基検出したのみで遺構密度が希薄である。このうち、調査区東側で検出した3基に直径約14～16cmの柱痕跡らしきプランを確認し、北北西－南南東方向に主軸をもつ掘立柱建物跡の可能性はあるが、柱筋も直線的ではなく、柱穴間も揃っていない。また、2201区で確認した2面の硬化層（整地面？）のどちらに属するものであるかも不明である。

表土層や遺物包含層より、土師質土器の碗や瓦質土器の捏鉢、須恵器甕、古銭などが出土した。

### 2203区（図8，図版3・4）

2201区と2202区の間から北側へ延びるトレンチ。平成21年度施工の雨水排水工事に伴う遺構確認のため、三城北側に位置する帯曲輪や切岸に設定した。なお、本調査区は、南北方向に広範囲におよぶことから、南より2203-1区、2201-2区、2203-3区と計3つの小区に区分した。

**2203-1区** 2201区・2202区が位置する帯曲輪直下の切岸で石垣（2号石垣）を検出した。野面積み石垣であり、不定形の自然礫を用いている。本石垣には、しまりのない土がまず堆積し、その後にしまりのある粘質土主体の土層が覆っている。切岸の傾斜角と比較して土層の傾きは緩やかである。なお、石垣の続きを確認するため調査区の約1m西側切岸を部分的に調査したが（2203-1'区）、この地点では石垣は検出できなかった。切岸の高さは約1m、傾斜角は40°～60°程とばらつきがある。

**2203-2区** 2203区の間付近に設定した。調査区に並行する形で石垣（1号石垣）を検出した。本石垣は、わずかな裏込め石を伴う野面積みの石垣であり、根石が良好に残存しており、一部に割石を用いて割面を西向きに揃える。石垣の石材に明瞭な矢穴跡を残すものが1石、やや不明瞭な痕跡があるものが1石の計2石を確認した。1～2段しか遺存していないため判然としないが、ほぼ垂直に石材を配置している印象を受けることから、それほど高い石積ではなかったと推察される。

当該調査区に位置する切岸の高低差は約2.5m、傾斜角は約50°。2203-1区と異なり、表土の堆積は少ないが、巨大な転石を含んだ粘質土主体の層が層序の中間にあり、1号石垣を被覆している。

**2203-3区** 2203区北側に設定した調査区で、2203区の各帯曲輪で唯一遺構を伴う。細長い溝状遺構やピットなど複数の遺構を検出したが、遺構保護の観点から埋土の完掘は行っていない。表土下に砂



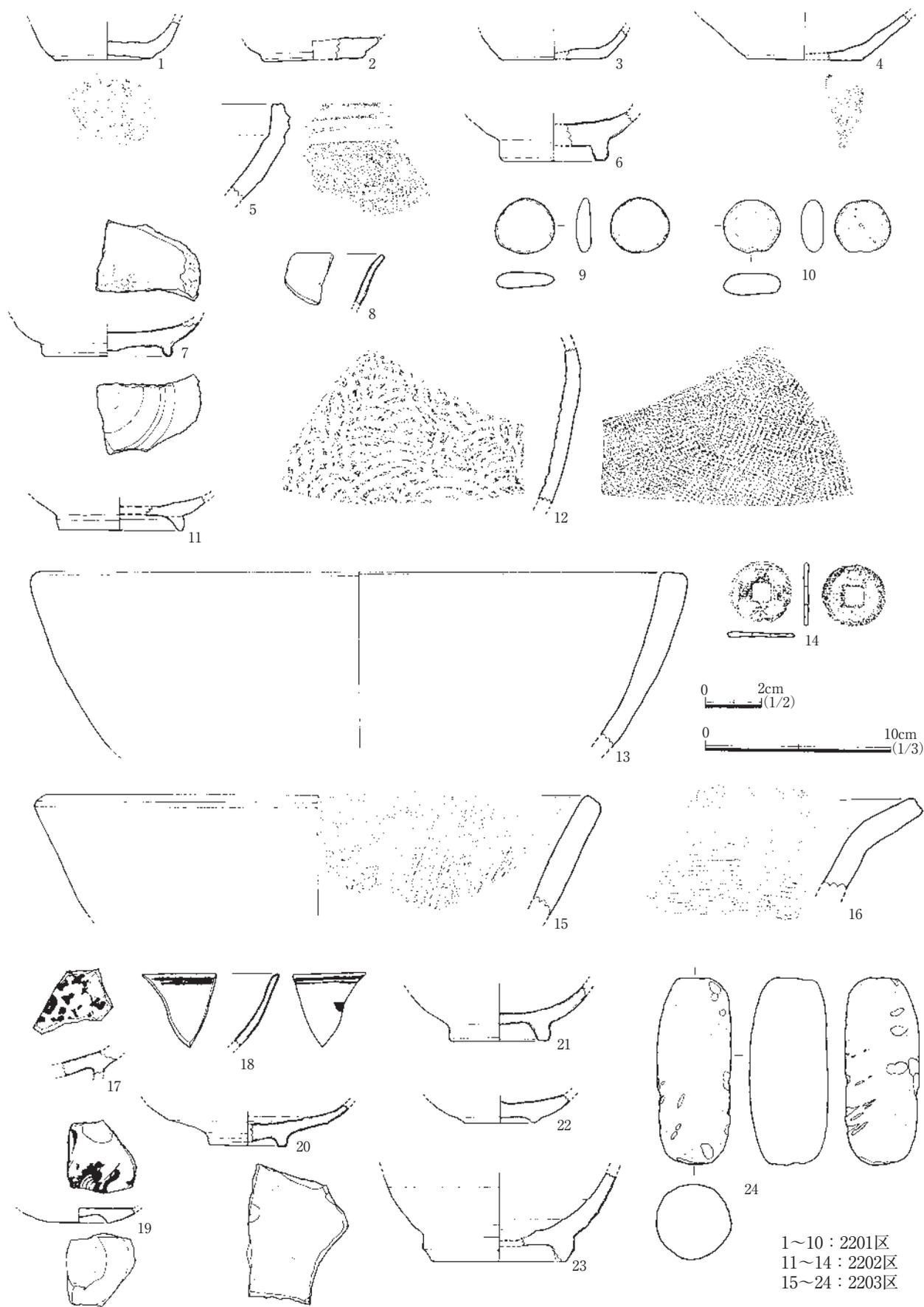


図9 22次調査出土遺物（9・10・14は1/2，その他は1/3）

礫を含んで、しまりのない旧耕作土層とみられる褐色土層と同様の埋土を有するプランがいくつかみられ、比較的新しい遺構を含むようである。

### 第3節 出土遺物

#### 遺構外出土遺物（図9，表3，図版5）

**2201区** 1～4は土師質土器で，1～3は坏，4は皿。口縁部を欠損している。以前の調査で出土した資料と同様に，磨耗により器面調整が不明なものを除き，法量の大小に関係なく全ての資料で内面及び外面は回転ナデ，底面は糸切り離しを施す。2の底面には，指頭押圧痕が認められる。5は瓦質土器の鉢で，硬質である。6～8は中国製陶磁器。6は14世紀後半～15世紀中頃の龍泉窯系青磁碗である。7も同じく14世紀後半～15世紀中頃の龍泉窯系青磁皿で，見込みに文様を施す。8は13世紀～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの白磁皿である。9・10は不整円形の碁石状石製品で，ほぼ同大である。9は粘板岩製で，灰黒色を呈しており，10はチャート製で，灰白色を呈している。9・10とも表面は丁寧に研磨を施す。

**2202区** 11は土師質土器の碗で，高台は粘土紐貼り付け後に整形している。12は須恵器の胴部片で内面に当て具痕がある。13は瓦質土器の捏鉢である。14は古銭（寛永通宝）で「□永通□」の文字が判読できる。

**2203区** 15・16は瓦質土器。15は播鉢で，5本単位の播目を施す。16は鉢で，口縁部が「くの字」状に屈曲する。17～19は中国・景德鎮窯系の染付で，17・18は碗，19は皿である。17は見込みがくぼむ「蓮子碗」で，16世紀前半～同中頃の製作。18は16世紀後半～17世紀初頭のもので，口縁部内外面に界線をめぐらす。19は見込みに文様を施す碁笥底の皿で，16世紀代の製作。20は1600～1630年製作の肥前系とみられる灰釉皿で，見込みに砂目痕がある。21は在地産の可能性のある鉄釉碗で，17世紀代か。22は1590～1610年代の肥前系陶磁の皿で，見込みに胎土目積みの痕跡が残る。23は17世紀末～18世紀前半の肥前系陶磁の瓶か壺とみられる。24は砂岩製の棒状石製品で，表面は比較的丁寧に研磨を施す。

表3 22次調査出土遺物観察表

2201区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
1	22-1	土師質土器 坏	1mm以下の砂粒	やや不良	内外:にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:摩耗のため不明	包含層 下層	② (2.1) ③ 5.3	底部糸切離し
2	22-2	土師質土器 坏	石英, 角閃石, 1mm程の砂粒	やや不良	内:にぶい褐 外:橙	内外:摩耗のため不明	包含層 下層	② (1.1) ③ 5.7	底部糸切離し, 底面に指頭押圧痕
3	22-22	土師質土器 坏	角閃石, 石英, 1mm程の砂粒	やや不良	内外:浅黄橙	内外:摩耗のため不明	表土層	② (1.7) ③ (6.0)	
4	22-23	土師質土器 皿	1mm未満の砂粒	良好	内外:浅黄橙	内:回転ナデ, ナデ 外:回転ナデ	検出面 直上	② (2.5) ③ (6.4)	底部糸切離し
5	22-24	瓦質土器 鉢	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	良好	内:黄灰 外:灰黄	内:ケズリ, ナデ 外:ケズリ, ヨコナデ, ナデ	包含層 下層	② (5.2)	
6	22-3	青磁 碗	緻密	良好	釉:明オリープ灰 胎:にぶい橙	内:施釉 外:ケズリ, 施釉	包含層 下層	② (2.6) ③ (5.8)	龍泉窯系
7	22-16	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリープ, にぶい橙 胎:灰白	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② (1.9) ③ (7.0)	龍泉窯系
8	22-21	白磁 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:施釉, ナデ 外:施釉	検出面 直上	② (2.8)	中国製
9	22-4	基石状石製品	粘板岩	-	内外:灰色	全体を研磨	包含層 下層	直径2.0~2.1, 最大厚0.6④3.6	
10	22-5	基石状石製品	チャート	-	内外:灰白色	全体を研磨	包含層 下層	直径1.9~2.0, 最大厚0.7④4.5	

2202区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
11	22-7	土師質土器 碗	角閃石, 長石, 1mm程の砂粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:回転ナデ 外:摩耗のため不明	包含層	② (1.9) ③ 6.5	
12	22-6	須恵器 甕	緻密	良好	内外:褐灰	内:青海波文(当て具痕), 外:タタキ	包含層	② (8.6)	
13	22-9	瓦質土器 捏鉢	角閃石, 石英, 1mm程の砂粒	やや不良	内:浅黄橙 外:黄灰	内外:摩耗のため不明	包含層	① (35.2) ② (9.4)	
14	22-8	古銭	青銅	-	青緑	-	包含層	直径2.3, 厚さ0.2④3.4	寛永通宝

2203区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)(残存値)	備 考
15	22-12	瓦質土器 搦鉢	角閃石, 石英, 1mm程の砂粒	良好	内:灰白, にぶい橙 外:浅黄橙, にぶい橙	内:ヨコナデ, ナデ, 搦目 外:ヨコナデ, ナデ	包含層 下層	① (30.2) ② (6.6)	2203-3区
16	22-13	瓦質土器 鉢	角閃石, 石英, 1~2mm程の砂粒	良好	内外:灰黄	内:ケズリ, ヨコナデ 外:ナデ, ヨコナデ	包含層 下層	② (4.8)	2203-3区
17	22-15	染付 碗	緻密	良好	釉:明青灰 胎:灰白	内外:施釉	包含層 上層	② (1.2)	2203-3区, 景德鎮窯系
18	22-19	染付 碗	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内外:施釉, 施文	包含層	② (4.0)	2203-3区, 景德鎮窯系
19	22-20	染付 皿	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施文, 施釉	排土中	② (0.8) ③ (3.0)	2203-1区, 景德鎮窯系
20	22-11	灰釉 皿	緻密	良好	釉:灰オリープ 胎:灰	内:施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層 下層	② (2.3) ③ (4.2)	2203-3区, 肥前系
21	22-10	鉄釉 碗	緻密	良好	釉:黒褐 胎:黒	内外:施釉 高台端部に砂目痕	包含層 下層	② (3.1) ③ (5.3)	2203-3区, 在地産か
22	22-17	陶器 皿	緻密	良好	釉:灰オリープ, 灰褐 胎:にぶい黄橙	内:施釉 外:回転ナデ, 施釉	包含層 下層	② (1.5) ③ 4.0	2203-3区, 肥前系
23	22-18	陶器 瓶?	緻密	良好	釉:にぶい黄褐 胎:にぶい赤褐	内:回転ナデ, 施釉 外:回転ナデ	石垣内	② (4.9) ③ (8.0)	2203-2区, 肥前系, 壺の可能性有
24	22-14	棒状石製品	砂岩	-	黄褐色	表面を研磨	包含層	長さ10.1, 最大径4.2④25.2	2203-3区

## 第4章 平成22年度（第23次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図10）

第23次調査は、平成22（2010）年9月から同年12月にかけて実施し、三城北西側帯曲輪に2地点（2301区・2302区）、平成22年度宇土城跡保存整備工事の雨水排水工事に伴う調査区（2303区）の計3地点で発掘調査を行った。調査面積は計101㎡で、内訳は2301区：34㎡、2302区：47㎡、2303区：20㎡である。

21・22次調査に引き続き、23次調査も三城周辺の帯曲輪の遺構確認を主目的とした調査である。三城東側の21次調査では、掘立柱建物跡を12棟検出し、同地に恒常的に建物が立地していたことが判明したが、21次調査区北西側で実施した22次調査では、一転して遺構の重複をあまり認めず、掘立柱建物跡の可能性のある柱列を検出した程度であり、三城東側と北側の帯曲輪では土地の利用状況に明確な違いがあることが判明した。

23次調査の結果、22次調査区よりさらに遺構密度が薄いことが明らかとなり、建物などを配置する空間として利用された痕跡は確認できなかった。

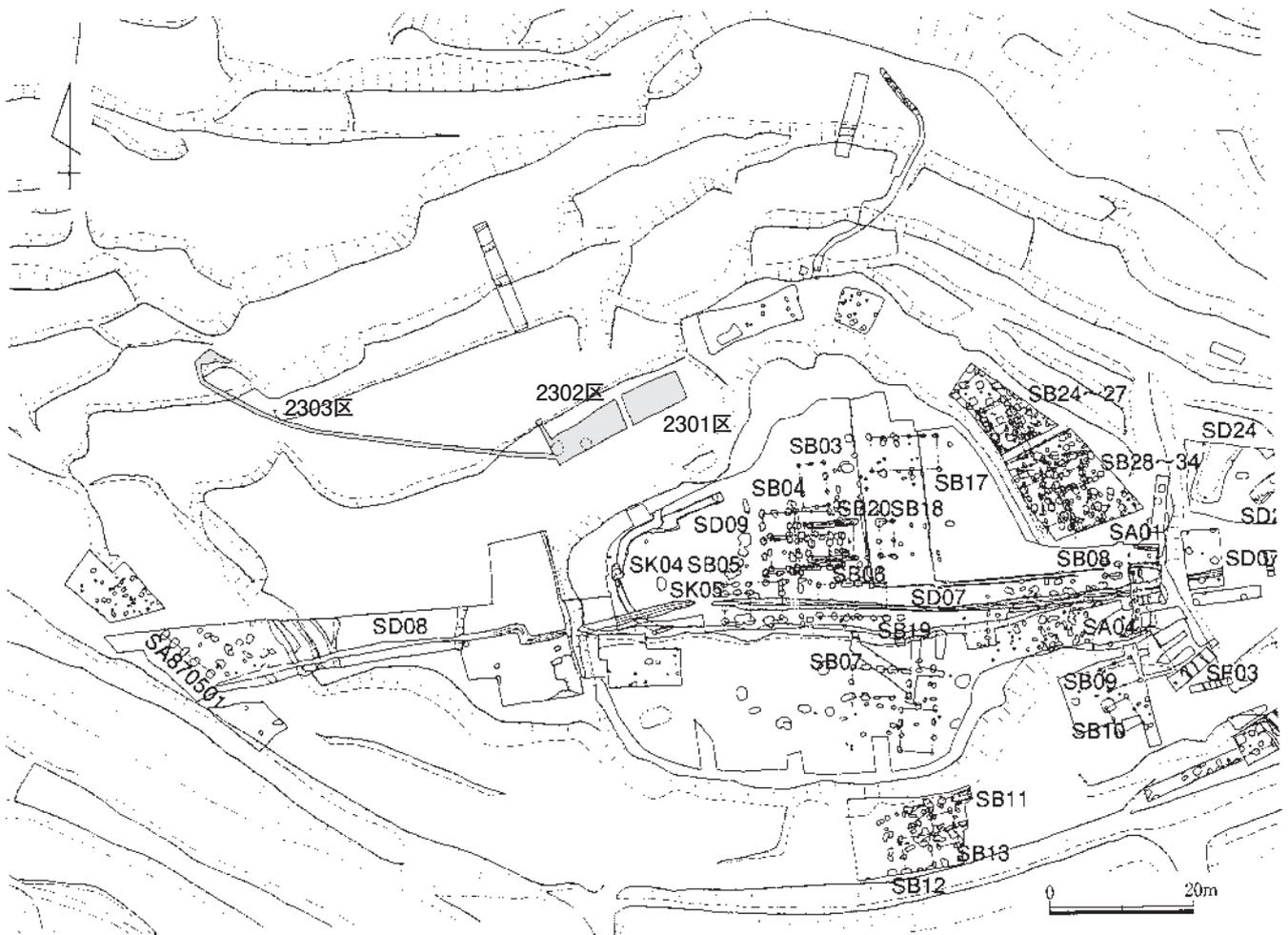


図10 23次調査区配置図（1/1,000，アミ部分：23次調査区）



以上の調査の結果、遺構外より須恵器の無蓋高坏や土師質土器の坏、瓦質土器（火鉢・播鉢など）、中国製陶磁器（青磁・染付など）、中近世の国産陶磁器（備前焼・肥前系陶磁）などの古墳時代から近世までの遺物が出土したが、遺構の少なさに比例し、その出土数はかなり少ないといえる。なお、後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

## （2）調査日誌抄

平成22（2010）年	10月5日	2302区で耕作に伴う畝状掘込み跡を検出。	
9月2日	23次調査予定地周辺の伐採。	10月12日	宇土市文化財保護審議会が調査現場を視察。
9日	鶴城中学校生徒職場体験（3名）。		2302区で畝状掘込み跡に先行する土坑と溝状遺構を検出。
16日	重機による表土除去。		
20日	第5回体験発掘を実施（参加者19名）。	10月13日	2301区で畝状掘込み跡埋土掘削開始。
21日	各調査区で遺物包含層掘削作業開始。	10月20日	掘削作業完了。遺構検出状況写真撮影。
28日	グリッド杭の設定。2301区で耕作に伴う畝状掘込み跡を検出。	11月15日	遺構実測作業開始。
		12月6日	遺構実測作業終了。

## 第2節 調査区の概要

### 2301区（図11，図版6）

三城北西直下に位置する帯曲輪に設定した調査区であり、22次調査2202区より南西へ約10mの距離にある。重機により表土を除去し、遺物包含層を人力で掘り下げて遺構検出作業を行った。その結果、表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、現況グラウンドレベルより約40cm下で地山面に達するが、これは22次調査2202区と同様に、調査区の大部分が耕作に伴い削平されたことに起因するものと推測される。

地山面で調査区全面にわたり南北に主軸をもつ畝状掘込み跡を検出したが、この連続する畝状の浅い掘込み跡は、三城南側帯曲輪で実施した19次調査、同西側帯曲輪で実施した20次調査などで検出しており、検出面や埋土の状況などから近現代以降の耕作に伴う造作と判断される。これらの地形改変の影響なのか、ピットや土坑などの遺構は検出していない。

表土や遺物包含層より、須恵器や土師質土器、中国製青磁・染付などが出土した。

### 2302区（図11，図版6・8）

2301区西隣に設定した調査区である。表土層と遺物包含層の堆積があまりなく、2301区同様に地山面で南北に主軸をもつ畝状掘込み跡を検出したが、本調査区においても遺構密度は希薄であった。

土坑状遺構S K11，S K12のうち、前者は長軸約1.0m×短軸約0.8m、検出面からの深さ0.5mで、底面において安山岩の剥片を確認した。これは、安山岩の巨石が抜き取られた痕跡とみられる。重複関係より、この遺構は畝状掘込み跡に先行することが明らかであり、本調査区より北東へ約30mにある大型の矢穴痕が並ぶ安山岩の巨石の存在とあわせて、加藤清正による近世宇土城改修の石垣石材採掘に伴う造作の可能性を指摘しておきたい。

また、同じく畝状掘込みに先行する遺構として、調査区東側で検出したS D23がある。幅約30cmで、主軸は北西－南東であり、畝状掘込み跡とは主軸を異にする。南側から北側に向かって傾斜すること、S D23内には拳大の礫が充填されていることなどから判断すれば、排水に関係する遺構とみられる。ただし、中世段階の遺構かどうかは判然としない。

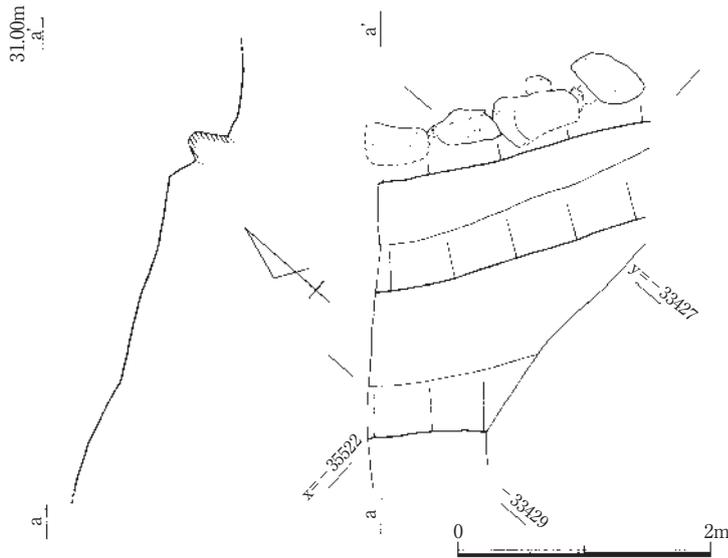
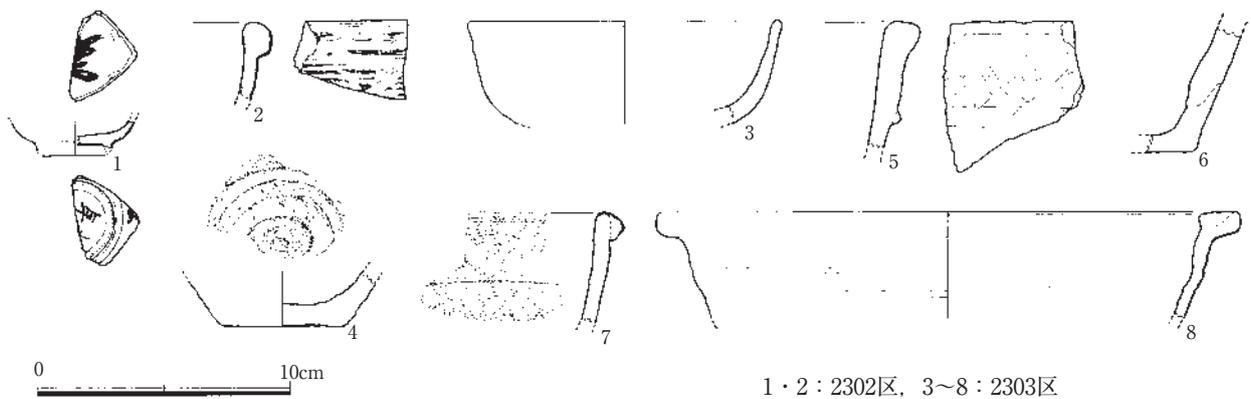


図12 2303区北端調査状況 (1/60)



1・2：2302区, 3～8：2303区

図13 23次調査出土遺物 (1/3)

表土や遺物包含層より、景德鎮窯系染付、肥前系などの近世陶磁器が出土した。

### 2303区 (図12, 図版7)

平成22年度宇土城跡保存整備工事の雨水排水工事に伴い設定した調査区である。調査の結果、溝状の掘込みや石垣などを検出したが、本調査区から出土した遺物から判断すれば、これらは中世段階のものでなく、近世以降の土地改変に伴うものと判断される。

表土や遺物包含層より、須恵器や土師質土器、瓦質土器、備前焼、肥前系などの近世陶磁器が出土した。

## 第3節 出土遺物

### 遺構外出土遺物 (図13, 表4, 図版8)

**2302区** 1は16世紀後半頃の景德鎮窯系染付の小杯で、高台内に「大□年□」の文字があることから、おそらく「大明年造」の銘を持つものであろう。2は17世紀後半頃～18世紀前半頃の肥前系片口鉢とみられ、外面に白化粧土で刷毛目文を施す。

**2303区** 3は須恵器の無蓋高坏の坏部と考えられる。4は土師質土器の鉢とみられ、底部に糸切り

痕が認められる。5は瓦質土器の火鉢で、口縁部外面にスタンプ文を施す。6は備前焼の壺の底部片で、15～16世紀代。7・8は肥前系陶磁。7は17世紀後半頃の口縁部が玉縁状を呈する鉄釉の播鉢。8はタキ成形の鉢で16世紀後半頃～17世紀初頭頃の製作。

表4 23次調査出土遺物観察表

## 2302区遺構外出土遺物

挿図 No.	実測 No.	種類 器種	胎土・材質	焼成	色調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備考
1	23-8	染付 小坏	緻密	良好	釉:明緑灰 胎:灰白	内外:施文, 施釉	包含層 ②	〈1.1〉 ③ 〈3.0〉	景德鎮窯系
2	23-2	陶器 片口鉢	緻密	良好	釉:にぶい黄橙 胎:橙	内外:施釉	包含層 ②	〈3.1〉	肥前系

## 2303区遺構外出土遺物

挿図 No.	実測 No.	種類 器種	胎土・材質	焼成	色調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備考
3	23-4	須恵器 無蓋高坏	1mm未満の砂粒	良好	内:灰 外:にぶい黄	内外:回転ナデ	包含層 ①	① 〈12.4〉 ② 〈4.1〉	
4	23-7	土師質土器 鉢	角閃石, 1～3mm程 の砂粒	やや不良	内:にぶい黄褐 外:黒褐	内:ナデ 外:ナデ, 施文	排土中 ②	② 〈2.2〉 ③ 〈4.8〉	
5	23-6	瓦質土器 火鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:暗灰黄 外:にぶい黄橙	内:ナデ 外:ケズリ, ナデ	包含層 ②	② 〈5.0〉	
6	23-5	備前焼 壺	緻密	良好	内:灰褐 外:赤褐	内外:ナデ	包含層 ②	② 〈5.1〉	
7	23-1	鉄釉陶器 播鉢	緻密	良好	内:にぶい褐 外:にぶい赤褐	内:ナデ, 播目 外:ケズリ, ナデ, 施釉	包含層 ②	② 〈4.4〉	肥前系
8	23-3	陶器 鉢	緻密	良好	内:にぶい褐 外:褐	内外:ナデ, 施釉	包含層 ①	① 〈23.0〉 ② 〈4.3〉	肥前系

## 第5章 平成23年度（第24次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図14）

第24次調査は、三城東側に位置する南北方向にやや長い帯曲輪に調査区2401区を設定し、平成23（2011）年9月から同年11月にかけて行った。調査面積は140㎡である。

本調査は、21次調査以降継続実施している三城周囲の帯曲輪における遺構確認を主目的とした調査の一環として実施した。調査の結果、調査区西隣の帯曲輪で多数検出したような掘立柱建物跡を確認することはできなかったが、中世の所産とみられる溝状遺構SD24を検出した。

遺構埋土や遺構外より土師質土器や須恵器、瓦質土器（捏鉢・播鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁・染付など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、基石状石製品などが出土した。後述する本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

なお、この帯曲輪の南側では、三城南側に東西方向に延びる溝跡SD07の範囲確認などを目的として19次調査で発掘調査を実施している。調査の結果、SD07が当該帯曲輪南側を東西方向に配され、さらに東側の曲輪まで延びることが判明しており、この調査内容については、平成25年度に刊行した『宇土

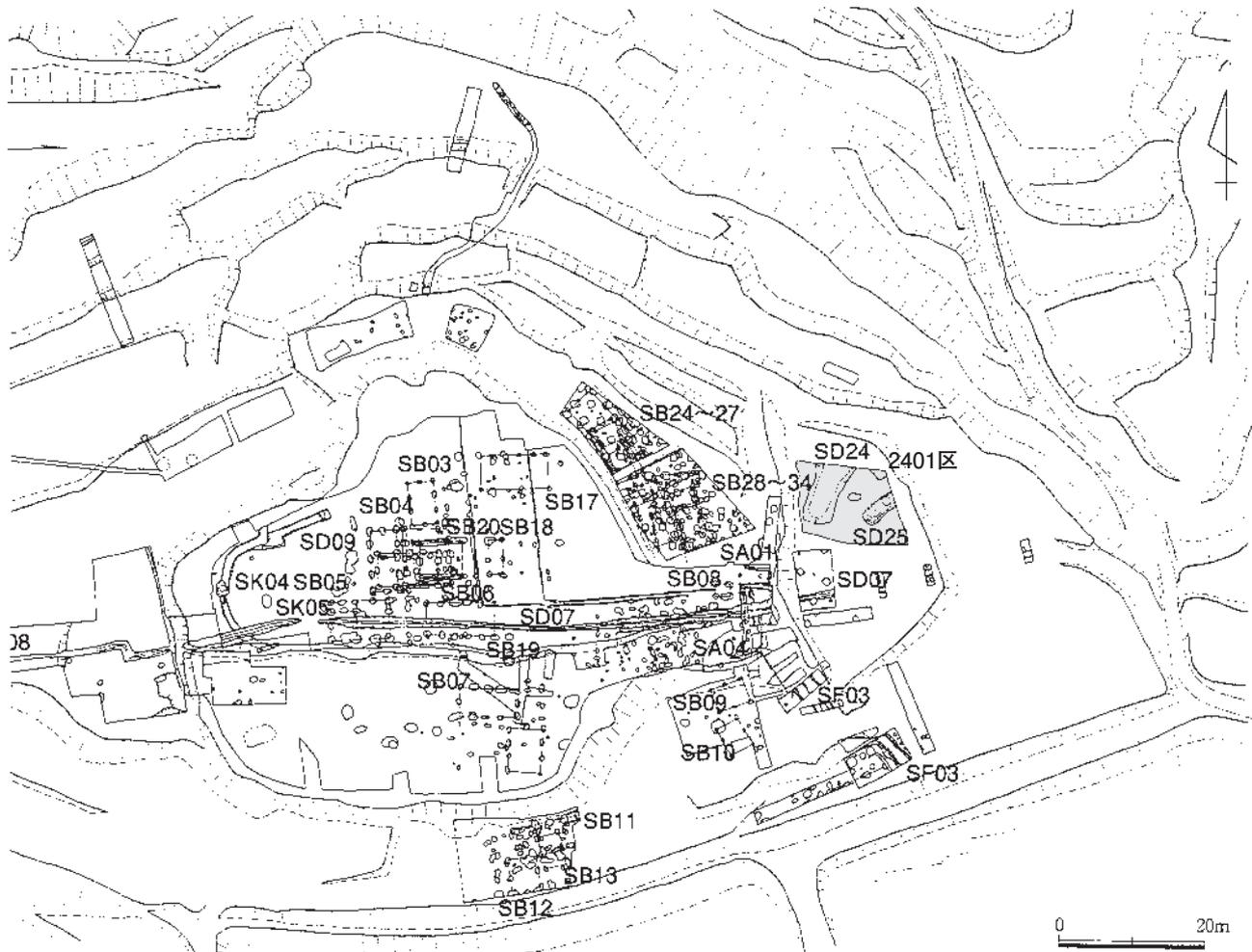


図14 24次調査区配置図（1/1,000，アミ部分：24次調査区）

城跡（西岡台）』XII（宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集，2014年）で報告している。

## （2）調査日誌抄

平成23（2011）年	10月3日	基盤層上面にて，部分的に遺構を確認。
9月15日 重機による表土層除去。	6日	地山面で部分的に溝状遺構 S D 24 検出。
23日 市民を対象とした第6回体験発掘を実施（参加者20名）。	26日	遺物包含層（3層・4層）掘り下げ終了。調査区遺構検出状況写真撮影。S D 24，S D 25で検出した遺構埋土を部分的に掘り下げ開始。
26日 遺物包含層（2層）掘削開始。	11月1日	掘り下げ終了。調査終了状況写真撮影。
29日 遺物包含層（2層）掘削終了。遺物包含層（3層）の掘り下げ開始。	16日	遺構実測図作成完了。

## 第2節 調査区の概要と検出遺構

### （1）調査区の概要（図15，図版9）

2401区は三城東側帯曲輪に設定した調査区であり，三城より東へ約30mの距離に位置する。19次調査で発掘調査を行ったT1904～T1906と同一の帯曲輪で，今回はその北側に調査区を設定した。

重機により表土を除去し，遺物包含層を人力で掘り下げ後，遺構検出作業を行った結果，2条の溝状遺構と2基の土坑，10基のピットを検出した。本調査は保存整備のための確認調査であるため，検出遺構の埋土を全て掘削することは避け，必要と判断される部分については，トレンチで埋土を掘削し，遺構の形状や堆積土の状況などを確認した。

本調査区の基本層序は5層に分けられる。1層は褐色土（表土），2層は1層よりややしまりのある暗褐色土で，3層はさらにしまりや粘性が強くなる。4層は地形が緩やかに下降する調査区東側のみで確認した。5層は基盤層（地山）である。なお，本調査区南側で実施した19次調査の結果，今回の調査区が位置する帯曲輪は，近現代の果樹植樹に伴う重機を用いた地形改変で基盤層上面まで攪乱がおよんでいることが判明しており，1～4層は地形改変後に堆積した土である。このことは，今回検出した遺構が全て5層上面で検出したことと整合する。

検出遺構のうち，中世期の遺構と推定されるものに溝状遺構 S D 24 がある。南北方向に主軸をもち，城郭関連の遺構と考えられる。S D 25は遺物が出土していないため時期が明確でない。また，2基検出した土坑（S K 13，S K 14）については，時期や性格を推定する手がかりが少なく，城郭に関連する遺構か不明である。

なお，調査区全体で合計10基検出したピットは，いずれも一辺80～90cm程度の方形を呈し，規則的に並んでいる。この類似の掘込み跡を21次調査区全面で検出しているが，これらは先述のとおり植樹痕と推定され，このことを示すように，1基から明らかな現代遺物（磁器）が出土している。

### （2）検出遺構（図15・16，図版10・11）

**S D 24** 調査区西側に検出した南北に主軸をもつ溝状遺構である。北側は調査区外に延び，南側は調査区南西隅で端部を確認した。検出規模は，長さ約8.5m，幅約4.2～4.5mである。遺構の形状や堆積状況などを確認するため，トレンチを2ヶ所設けて調査した結果，検出面から約0.6mの深さで平坦面を検出した。埋土は1～2層に分けられ，時期をおかずに埋没した可能性が高い。断面は逆台形を呈する。埋土より土師質土器や須恵器を主体とした土器片や龍泉窯系青磁片，滑石製石鍋片などが出土し，

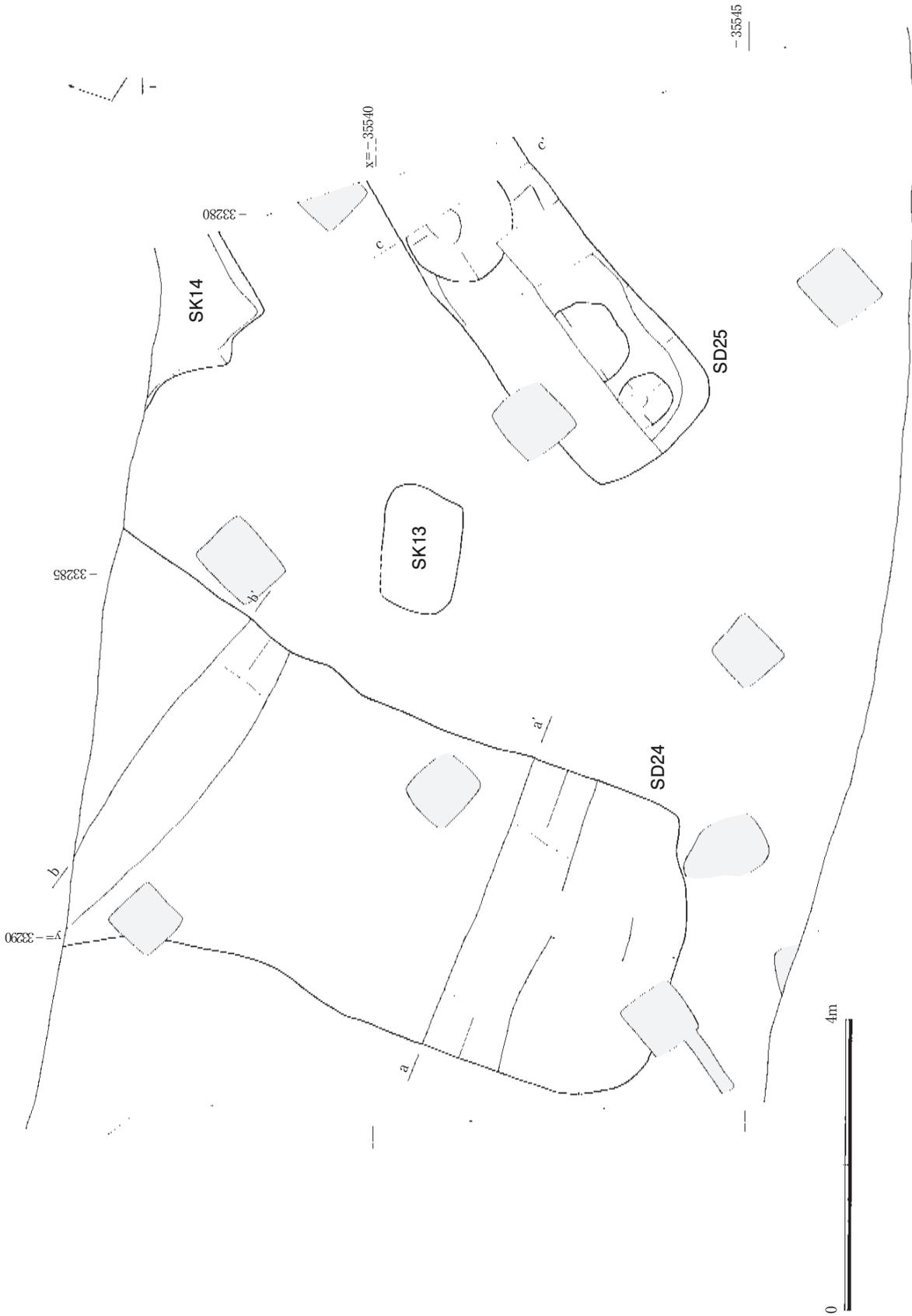


図15 2401区遺構配置図（1/80、アミ部分は攪乱）

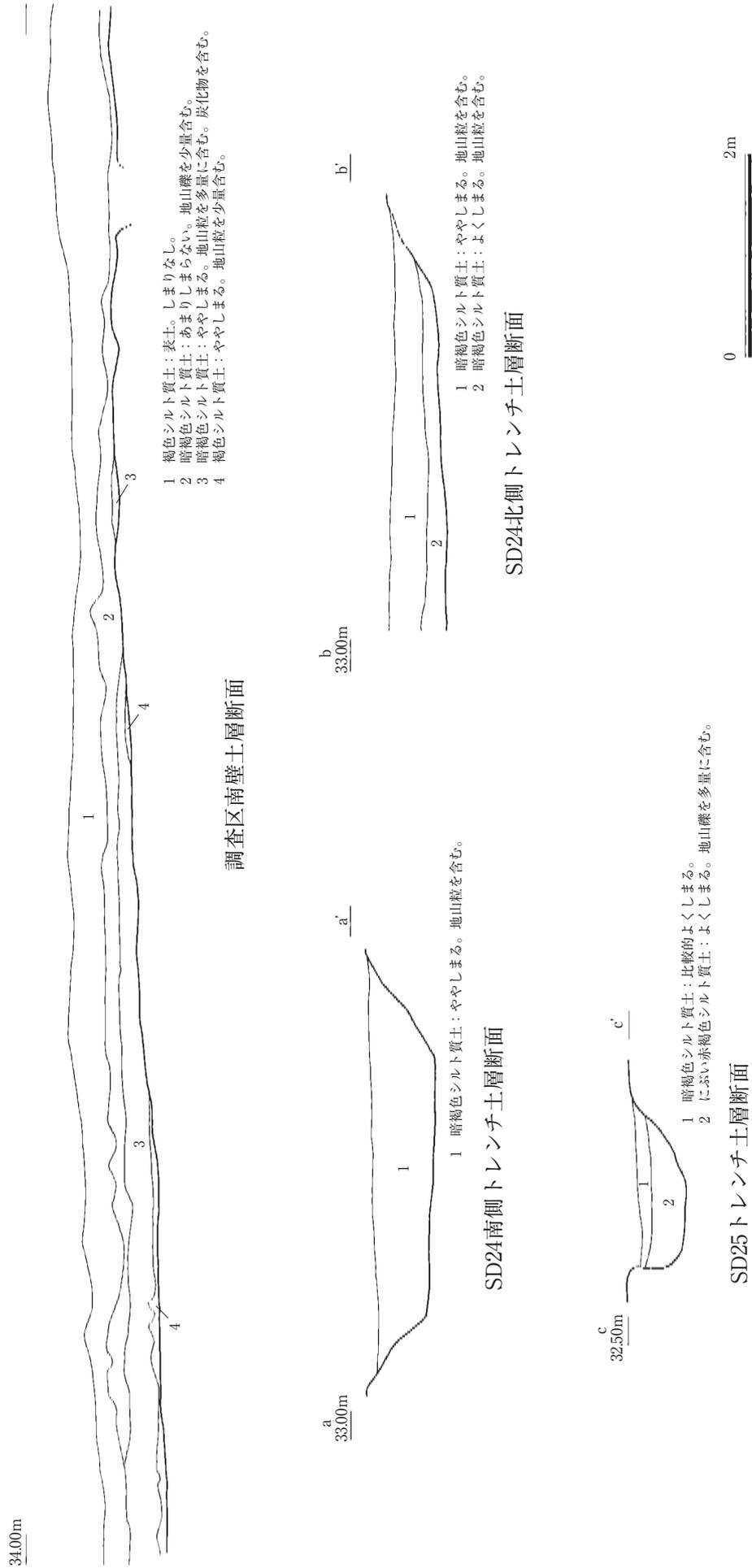


図16 2401区及びSD24・25土層断面図 (1/60)

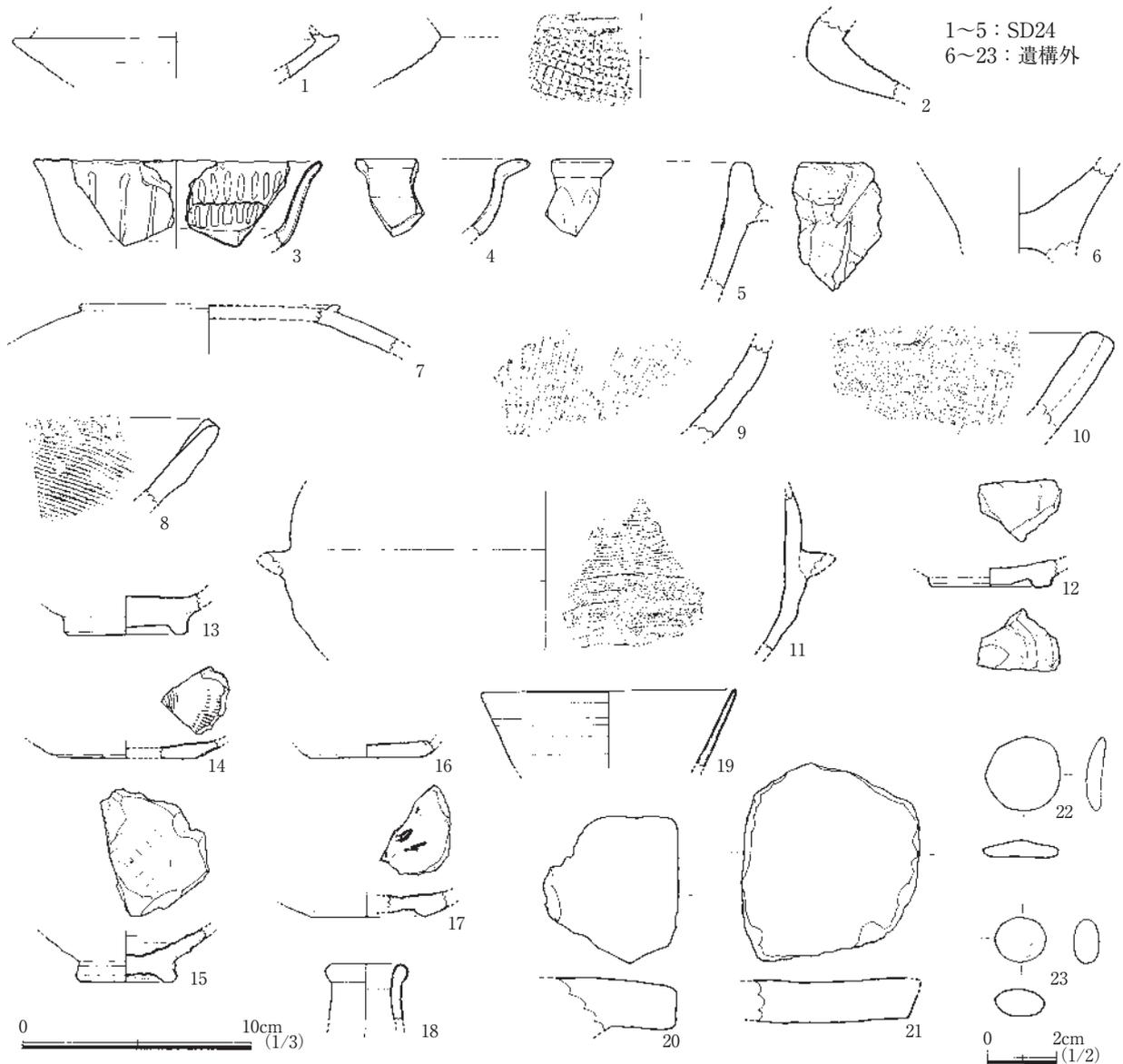


図17 24次調査出土遺物（22, 23は1/2, その他は1/3）

近世以降の遺物を包含しないことから、本遺構は中世段階のものと推定される。

調査当初、配置状況から竪堀跡と想定していたが、後述する第6章で報告する第25次2504区の調査によってこのことは否定された。また、底面において明確な硬化面は検出していないが、帯曲輪内に配置された道として利用されていた可能性がある。

**SD25** 調査区東側で検出した南西－北東方向に主軸をもつ溝状遺構である。検出規模は、長さ約5.0m、幅約2.2m、深さ約0.5m。東側は調査区外に延びており、部分的に掘り下げた結果、底面は整形されておらず凹凸があることから、未完成の溝だった可能性がある。遺物は出土しておらず、時期は明確ではない。

### 第3節 出土遺物

#### SD24（図17, 表5, 図版11）

1・2は須恵器。1は7世紀前半頃の坏身で、内外面とも回転ナデを施す。2は甕の頸部片で外面に

格子状タタキを施す。3・4は龍泉窯系青磁。3は14世紀末頃～15世紀中頃の皿で、外面に簡略化した蓮弁文、内部側面には菊花状の文様を施す。4は外面に蓮弁文を施文する14世紀代の皿。口縁部が「くの字」形に屈曲する。5は滑石製石鍋で、内外面とも研磨痕がある。

**遺構外出土遺物**（図17，表5，図版11）

6～11は土器。6は弥生時代後期の甕の脚部片である。7は小型のつまみを有する蓋とみられる須恵器で、頂部に細い粘土紐を貼付けてつまみを成形している。8～11は瓦質土器で、8は捏鉢，9・10は挿鉢，11は羽釜である。9は6本単位，10は5本単位の挿目をそれぞれ施す。11の鏝部は粘土帯貼り付けで成形する。

12～19は陶磁器で、12～17は中国製及び李朝陶磁，18・19は肥前系陶磁。12～14は青磁で、12は龍泉窯系の皿で14世紀末頃～15世紀代，13は龍泉窯系の碗で13～14世紀代の製作。14は12～13世紀代の同安窯系の皿で、見込みに櫛描きを施す。15は李朝陶磁の可能性が高い砂目積みの陶器で、15～16世紀代のもの。16は13世紀代～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの中国製白磁皿。17は16世紀後半頃の漳州窯系染付の碁笥底皿で、見込みに文様を施す。18は白磁もしくは染付の瓶の口縁部で、江戸後期のもの。19は白磁碗。18世紀代の製作。

20・21は近世とみられる瓦で、20は丸瓦，21は平瓦の破片である。22は灰白色を呈する小型の円盤状陶製品で、おはじきか碁石として使用されたものか。23は楕円形を呈する碁石状石製品である。粘板岩製とみられ灰黒色を呈し、表面は丁寧に研磨を施す。

表5 24次調査出土遺物観察表

S D24出土遺物									
挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
1	24-2	須恵器 坏身	緻密	良好	内:灰黄褐 外:黄灰	内外:ナデ	埋土	② 〈2.1〉	
2	24-7	須恵器 甕	1mm程の砂粒	良好	内:灰 外:黄灰	内:ナデ 外:格子状タタキ, ナデ	埋土	② 〈3.6〉	
3	24-15	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内外:施文, 施釉	埋土	① 〈12.0〉 ② 〈3.8〉	龍泉窯系
4	24-22	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施釉 外:施文, 施釉	埋土	② 〈3.4〉	龍泉窯系
5	24-11	石鍋	滑石製	-	内外:灰	内外面とも研磨	埋土	② 〈5.6〉	
2401区遺構外出土遺物									
挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
6	24-3	弥生土器 脚台付甕	角閃石, 石英, 1~ 2mm程の砂粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:ケズリ, ナデ 外:ナデ	包含層	② 〈3.9〉	
7	24-8	須恵器 蓋	緻密	良好	内:灰 外:オリーブ灰	内外:ナデ	包含層	② 〈2.1〉	
8	24-4	瓦質土器 捏鉢	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ケズリ, ナデ 外:ユビオサエ, ナデ	包含層	② 〈3.9〉	
9	24-5	瓦質土器 搦鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:淡黄	内:ナデ, 搦目 外:ユビオサエ, ナデ	包含層	② 〈4.2〉	
10	24-6	瓦質土器 搦鉢	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ナデ, 搦目 外:ナデ	包含層	② 〈4.8〉	
11	24-1	瓦質土器 羽釜	雲母, 1mm程の砂粒	やや不良	内外:灰黄	内外:ケズリ, ナデ	包含層	② 〈7.0〉	
12	24-19	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:回転ナデ, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.2〉 ③ (5.3)	龍泉窯系
13	24-18	青磁 碗	緻密	良好	釉:オリーブ灰 胎:灰白	内:施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.8〉 ③ (5.4)	龍泉窯系
14	24-16	青磁 皿	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈0.8〉 ③ (6.0)	同安窯系
15	24-20	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:浅黄橙	内:回転ナデ, 施釉 外:施釉	包含層	② 〈2.4〉 ③ (4.2)	李朝陶磁の可能性 高い
16	24-23	白磁 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈0.7〉 ③ (5.0)	中国製
17	24-17	染付 皿	緻密	良好	釉:灰白 胎:浅黄橙	内:施文, 施釉 外:ロクロケズリ, 施釉	包含層	② 〈1.1〉 ③ (5.0)	漳州窯系
18	24-21	白磁 瓶	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内:ナデ, 施釉 外:施釉	包含層	② 〈3.6〉 ③ (2.5)	染付の可能性も有 肥前系
19	24-14	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内外:施釉	包含層	② 〈11.0〉 ③ (11.2)	肥前系
20	24-10	瓦 丸瓦	1~5mm程の砂礫	良好	灰	ナデ	包含層	残長5.8	
21	24-9	瓦 平瓦	1~4mm程の砂礫	良好	灰黄	ヘラナデ, ナデ	包含層	残長8.5, 厚さ1.8	
22	24-13	円盤状陶製 品	緻密	良好	灰白	施釉	包含層	直径2.2, 最大厚0.5 ④3	
23	24-12	基石状石製 品	粘板岩か	-	オリーブ黒	全体を研磨	包含層	直径1.3~1.4, 最大 厚0.7 ④3	

## 第6章 平成24年度（第25次）発掘調査

### 第1節 調査の概要

#### （1）調査の概要（図18）

第25次調査は、平成24年5月から同年9月にかけて実施し、2501区～2504区の計4地区に分けて発掘調査を行った。調査面積は計146㎡で、内訳は2501区：54㎡、2502区：75㎡、2503区：8㎡、2504区：9㎡である。

本調査の主たる目的は、第1次調査において三城南東側で検出した道路状遺構SF03（1次調査検出のSX01と同一遺構）未確認部分を明らかにすることであり、平成24年度保存整備工事で当該遺構を復元整備するにあたり、形状や範囲などを確認する必要がある。SF03は西岡台南側から三城へ登るための通路として機能しており、現代においても里道として踏襲されていたことがわかっている。また、19次調査でもその一部を確認している。

調査の結果、SF03の未確認部分を検出した。また、遺構埋土や遺構外より土師質土器（坏・播鉢）や須恵器（甕・碗）、瓦質土器（捏鉢・火鉢など）、中国製陶磁器（青磁・白磁など）、近世の国産陶磁器（肥前系）、鉛玉（鉄砲玉）などが出土したが、本章第3節に掲載している出土遺物以外は小片のため図化していない。

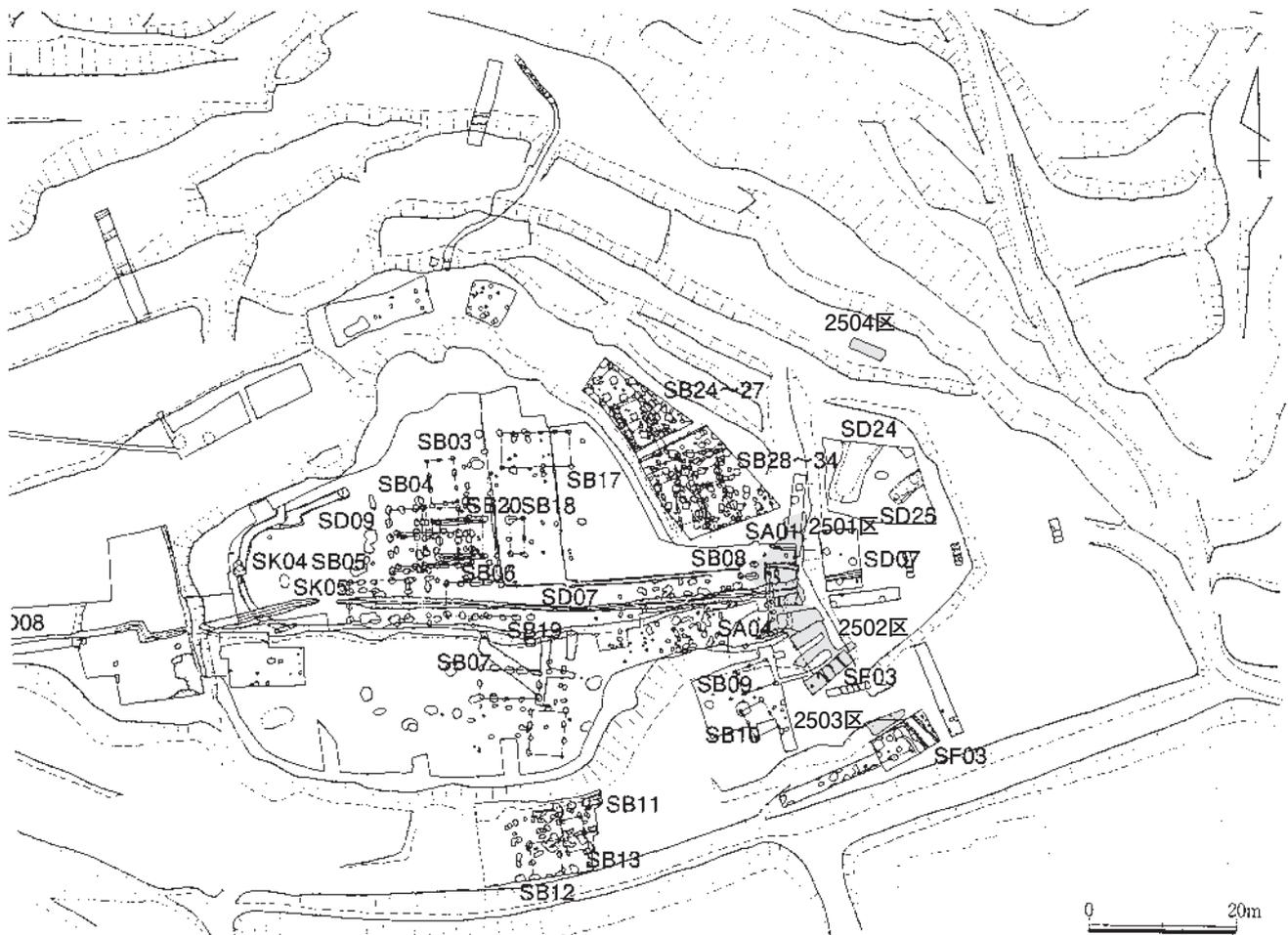


図18 25次調査区配置図（1/1,000、アミ部分：25次調査区）

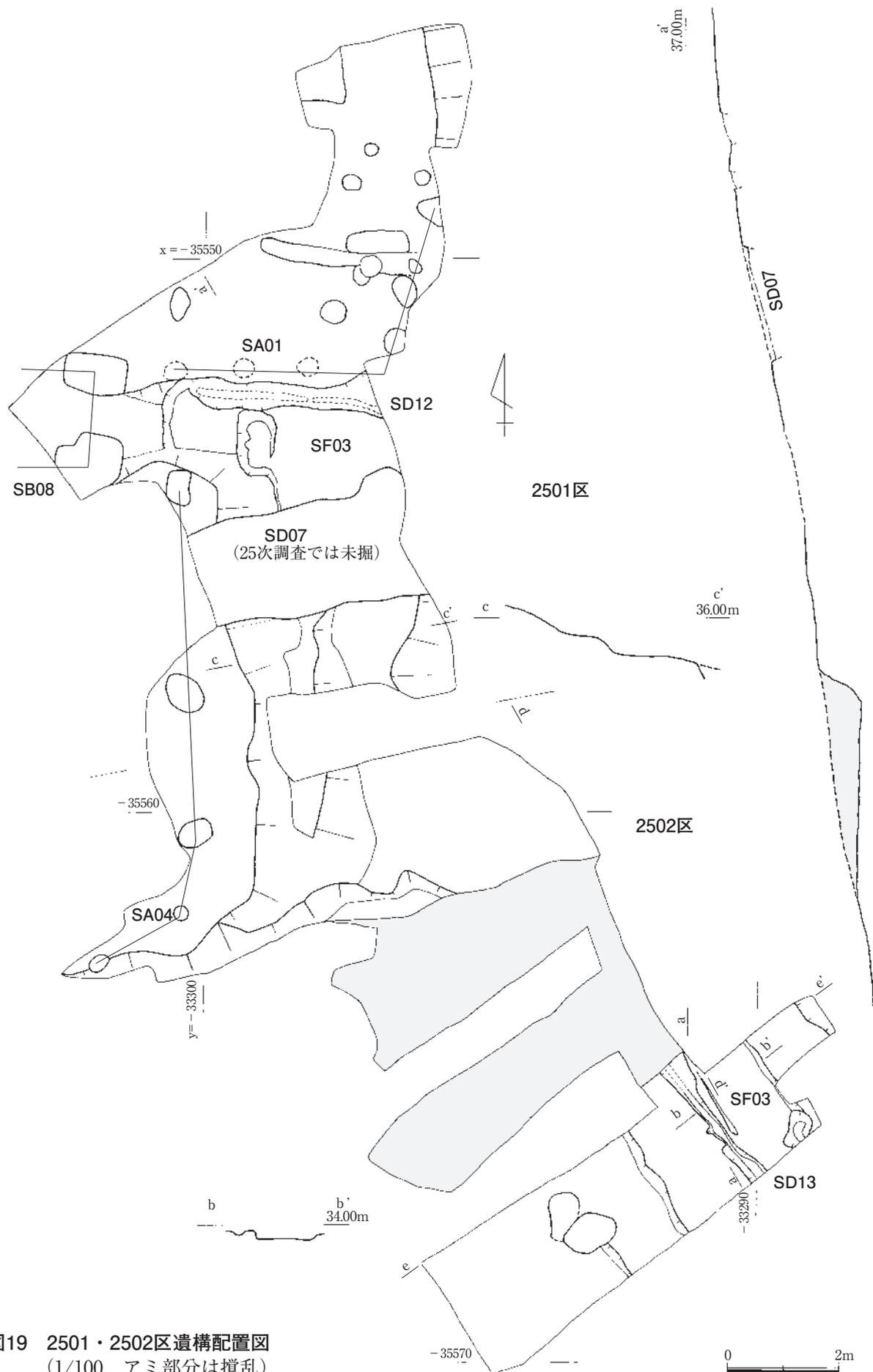


図19 2501・2502区遺構配置図  
(1/100, アミ部分は攪乱)

なお、調査期間中の6月3日、「西岡台キャッスルウォーキング」と題した現地見学会を実施した。これは、宇土城跡全域を歩き、曲輪・堀跡などの城郭遺構や発掘調査の成果などを説明して参加者に城跡の全体像を紹介する取組みであった。その一環として、25次調査状況について発掘現場で説明を行った。

## （2）調査日誌抄

平成24（2012）年	5月15日	重機による表土除去。	13日	2502区南東隅調査区を拡張。道路状遺構 S F 03 の幅を確認。2503区を東側へ拡張。
	17日	調査開始。2501区及び2502区で攪乱層の除去と層ごとの掘り下げ開始。	15日	2504区完掘状況写真撮影。
	28日	2501区にて第1次調査の遺構プランを再確認。2502区の南側に新たに2503区を設定。2502区と並行して堆積土の掘り下げ開始。	20日	2501～2503区調査状況写真撮影。
	31日	2501区で第1次調査検出遺構を全て確認。	7月5日	平成24年度第1回史跡宇土城跡保存整備検討委員会の指摘事項にもとづき、門跡 S B 08 周辺の柵跡 S A 01 の配置状況を確認するため、2501区を拡張。
6月3日		城郭遺構と25次発掘調査現場を見学する「西岡台キャッスルウォーキング」開催（参加者25名）。	9日	拡張部分を中心とした調査状況写真撮影。発掘作業終了。
	6日	24次調査で検出した溝状遺構 S D 24 の範囲を確認するため、24次調査区北側帯曲輪に2504区を設定、調査開始。	8月23日	調査区内に遺構実測用基準杭を設置。
	7日	2504区調査終了。遺構は確認できず、S D 24 は	9月15日	遺構実測図作成終了。
			27日	重機による調査区の埋め戻し。

## 第2節 調査区の概要と検出遺構

### 2501区・2502区（図19・20，図版12～15）

24年度保存整備工事に伴い、S F 03の範囲や形状などを確認するために設定した調査区で、1次調査範囲と一部重複している。三城南東側で検出した城門跡 S B 08 の北側付近から、19次調査 T 1903 までの約20mの間で設定し、その中間付近の土層観察用ベルトを境として北側を2501区、南側を2502区とした。

調査の結果、1次調査で検出した S F 03 や柵列跡 S A 01、城門跡 S B 08、溝跡 S D 07 のほか、S B 08 南側で新たに柵列跡 S A 04 を検出した。今回の調査によって、三城へと至る道路や城門、柵のセット関係がより明確になったといえる。以下では、1次調査で未確認部分を検出した S F 03 や S A 01、新たに検出した S A 04 について報告したい。

**S F 03** 上述のとおり、本遺構は西岡台南側から三城へ上るための通路として機能しており、現代においても里道として踏襲されていたことを1次調査で確認している。三城南東側付近から南北方向に延びるが、S B 08 手前で西側に向かって直角方向に折れ、階段状に地山を削り出だした部分を上って S B 08 に至ることが判明している。

検出規模は、長さ約19.2m、幅は約1.2～4.0mで、地点によって幅が大きく異なることが判明した。傾斜角度は約9°である。19次調査では通行に伴うとみられる硬化面を検出したが、今回の調査では明確な硬化面を確認することはできなかった。なお、2502区中央付近で重機による削平を受けていることが判明した。

**S A 01** S F 03 の北側から切岸上端にかけて沿うようにして配置された柵列跡である。検出規模は約6.8mで、平面プランはLの字形を呈する。

第2節 調査区の概要と検出遺構

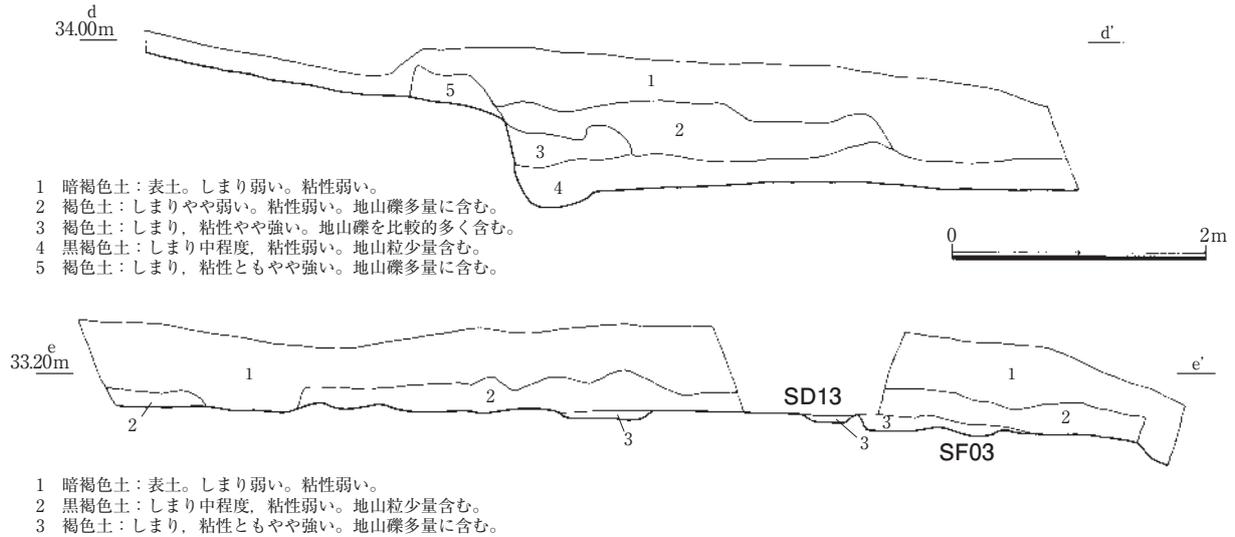


図20 2502区土層断面図 (1/60)

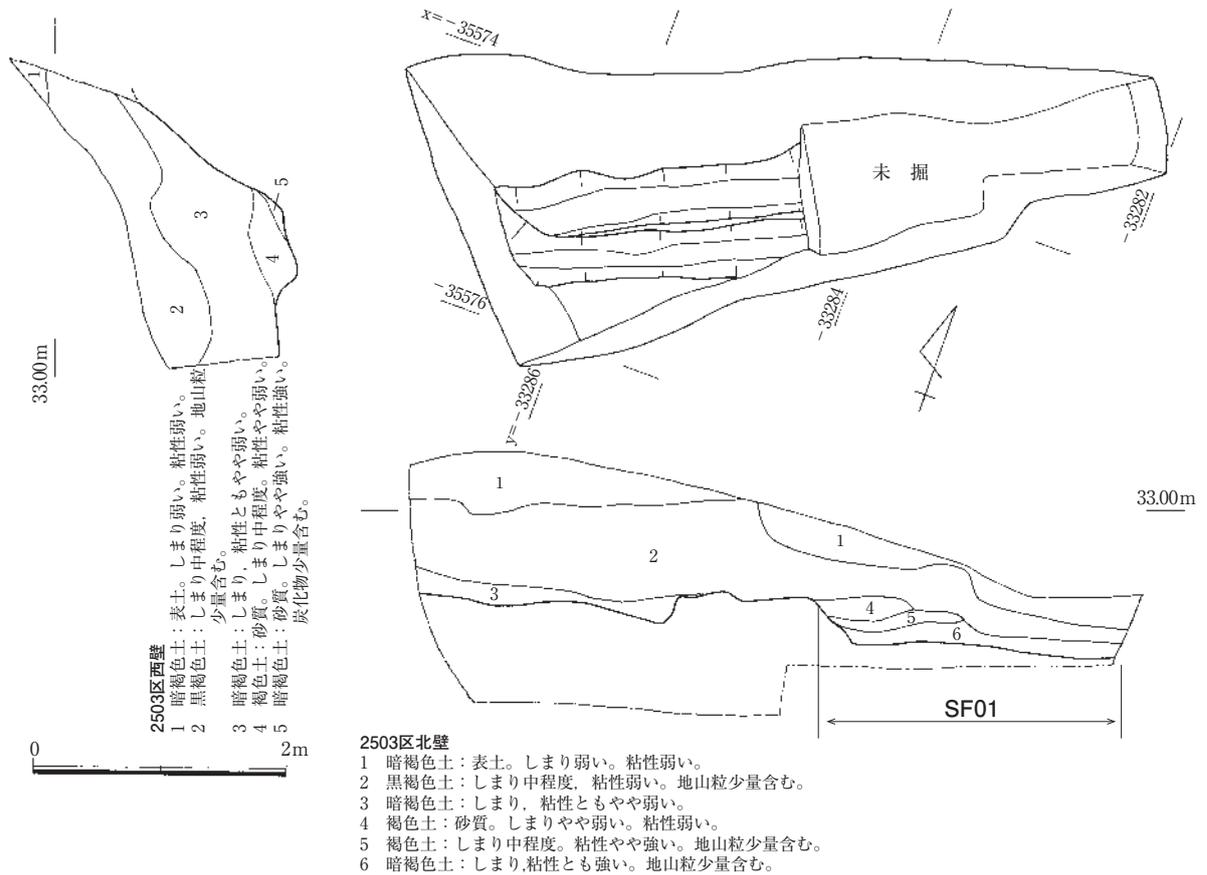


図21 2503区平面図及び土層断面図 (1/60)



図22 2504区北壁土層断面図 (1/60)

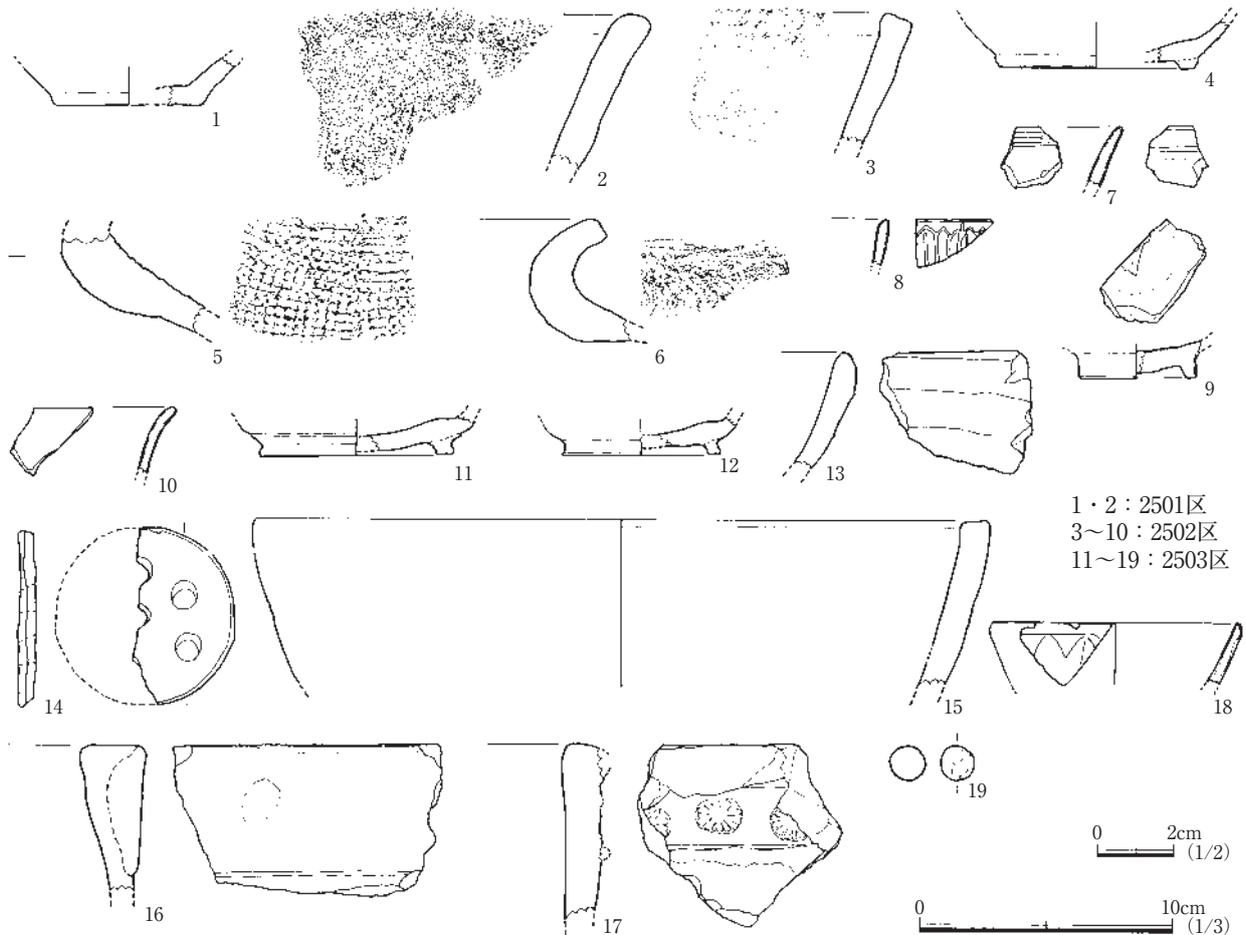


図23 25次調査出土遺物（19は1/2，その他は1/3）

**SA04** SB08南側に位置し，SF03西側から切岸上端部を沿うようにして配置された柵列跡である。検出規模は約10.7mである。調査区西側の未調査区域にさらに延びる可能性がある。

#### 2503区（図21，図版15）

SF03の範囲確認を目的として，平成18年度に調査実施したT1902の北約3m付近に本調査区を設定した。

調査の結果，SF03の一部を検出したが，後世の削平とみられる造作で斜面部において断面部分を検出したのみであった。検出最大幅は約2.4mであり，東側の未掘部分に反対側の立ち上がりが存在するとみられる。

#### 2504区（図22，図版15）

第24次調査で検出した溝状遺構SD24について，竖堀の可能性があったことから，その存在の有無を確認するため24次調査区北側のSD24主軸延長上の三城北東側帯曲輪に設定した調査区である。

調査の結果，表土除去後，遺物包含層を約20cm掘り下げたところで地山面を検出した。本調査区では遺構を検出しておらず，SD24は竖堀ではないことが判明した。

### 第3節 出土遺物

#### 遺構外出土遺物（図23，表6，図版16）

**2501区** 1は土師質土器の坏である。2も土師質土器で，器種は播鉢である。全体的に摩耗が著しいが，

内面に拵目が確認できる。

2502区 3は土師質土器の拵鉢で、5本単位の拵目を施す。4・5は須恵器。4は古代の碗の底部片、5は甕の胴部上位の破片で外面は格子状タタキ痕が残る。6は瓦質土器の甕の頸部片。7・8は龍泉窯系青磁の碗。7は12～13世紀代のもので、口縁部内面に2条の界線を施す。8は外面に剣先蓮弁文を施すもので、15世紀中頃～同末頃の製作。9・10は中国製白磁。9は皿とみられ、明代の製作。10は13世紀～14世紀中頃のいわゆる口ハゲの白磁碗である。

2503区 11・12は古代の須恵器で、碗の底部片。13・14は土師質土器で、13は鉢、14は近世の目皿で、直径1cm程度の複数の穿孔を有する。15～17は瓦質土器で、15は捏鉢、16・17は火鉢である。16は口縁部外面が鉢巻状に肥厚しており、17は口縁部外面に横位に連続するスタンプ文（菊花文）を施文している。18は13世紀代～14世紀中頃の龍泉窯系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文を施す。19は鉛玉で、鉄砲玉として使用したものであろう。

表6 25次調査出土遺物観察表

2501区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
1	25-12	土師質土器 環	1mm以下の砂粒	やや不良	内外:橙	内:摩耗のため不明 外:ナデ	攪乱層	②〈1.9〉③〈6.0〉	
2	25-5	土師質土器 拵鉢	雲母, 角閃石, 1～ 2mm程の砂粒	良好	内:橙 外:にぶい黄橙	内:ナデ, 拵目 外:ナデ	攪乱層	②〈6.2〉	

2502区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
3	25-8	土師質土器 拵鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:にぶい黄橙	内:ナデ, 拵目 外:ナデ	包含層	②〈5.3〉	
4	25-16	須恵器 碗	1mm未満の砂粒	やや不良	内:褐灰 外:灰黄褐, 黒	内:ナデ 外:ヨコナデ	表土層	②〈2.0〉③〈8.0〉	
5	25-6	須恵器 甕	1mm程の砂粒	良好	内外:灰	内:ナデ 外:格子状タタキ, ナデ	包含層	②〈4.1〉	
6	25-3	瓦質土器 甕	石英, 角閃石, 1mm 程の砂粒	良好	内:浅黄 外:にぶい黄橙	内:ナデ 外:タタキ, ナデ	表土層	②〈4.9〉	
7	25-17	青磁 碗	緻密	良好	釉:オリーブ黄 胎:灰黄	内外:施文, 施釉	表土層	②〈2.4〉	龍泉窯系
8	25-18	青磁 碗	緻密	良好	釉:灰オリーブ 胎:灰白	内:施釉 外:施文, 施釉	包含層	②〈1.9〉	龍泉窯系
9	25-13	白磁 皿	緻密	良好	釉:明オリーブ灰 胎:灰白	内外:施釉, 回転ナデ	表土層	②〈1.5〉③〈4.6〉	中国製
10	25-14	白磁 碗	緻密	良好	釉:灰白 胎:灰白	内外:施釉	表土層	②〈2.7〉	中国製

2503区遺構外出土遺物

挿図 No	実測 No	種 類 器 種	胎土・材質	焼成	色 調	器面調整・技法などの特徴	層位	①口径②器高③底径 ④重量[cm・g] ※(復元値)〈残存値〉	備 考
11	25-10	須恵器 碗	1mm程の砂粒	良好	内:黄灰 外:灰	内外:ナデ	包含層	②〈1.5〉③〈7.4〉	
12	25-11	須恵器 碗	1mm以下の砂粒	良好	内外:灰	内外:ナデ	包含層	②〈1.5〉③〈6.0〉	
13	25-7	土師質土器 鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:灰黄 外:浅黄	内外:ナデ	包含層	②〈4.7〉	
14	25-9	土師質土器 目皿	角閃石, 1mm以下の 砂粒	良好	内:橙 外:にぶい橙	ナデ	包含層	直径7.0, 厚さ0.7	
15	25-4	瓦質土器 捏鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内外:灰白	内外:ナデ	表土層	①〈29.0〉②〈6.7〉	
16	25-1	瓦質土器 火鉢	角閃石, 1mm程の砂 粒	良好	内:にぶい黄橙 外:褐灰	内:ヨコナデ, ナデ 外:ヨコナデ	包含層	②〈5.9〉	
17	25-2	瓦質土器 火鉢	角閃石, 長石, 1～ 2mm程の砂粒	良好	内:灰黄褐 外:黄灰	内:ナデ 外:ナデ, 施文	包含層	②〈7.0〉	
18	25-15	青磁 碗	緻密	良好	釉:緑灰 胎:灰白	内外:施釉	包含層	①〈10.0〉②〈2.5〉	龍泉窯系
19	25-19	鉛玉	鉛	-	灰白	-	包含層	④4.2	鉄砲玉

## 第7章 まとめ

### (1) 三城周辺の縄張りとは発掘調査について

宇土城跡の発掘調査は、昭和49・50年度の第1次調査を皮切りに平成26年度までに計27次にわたって実施している。このうち、三城及び周辺地区の調査は、1次～3次、13次、19次～25次の計11次実施した(表1)。検出した主な遺構は、掘立柱建物跡(SB04, SB05など)、城門跡(SB08)、柵列跡(SA01, SA04)、道路状遺構(SF03)、導水状遺構(SD09)<sup>1)</sup>などであり、これらの多くは1次調査で検出している(図4, 宇土市教育委員会1977)。また、導水状遺構を除き、主郭である千畳敷でも同種の遺構を検出しており、出土遺物の時期も大きな差はないことから、両曲輪は比較的長期間にわたって並存し、利用されていたと判断される。

三城の規模は、東西約65m、南北約35mであり、主郭の千畳敷(東西約50m、南北約65m)と比べてやや規模は小さいが、他の宇土名和領の中世城郭では主郭クラスの規模を有している(図2, 表2)。ただし、三城は千畳敷のような横堀や縦堀は存在せず、三城の曲輪面とその直下を囲繞する帯曲輪との

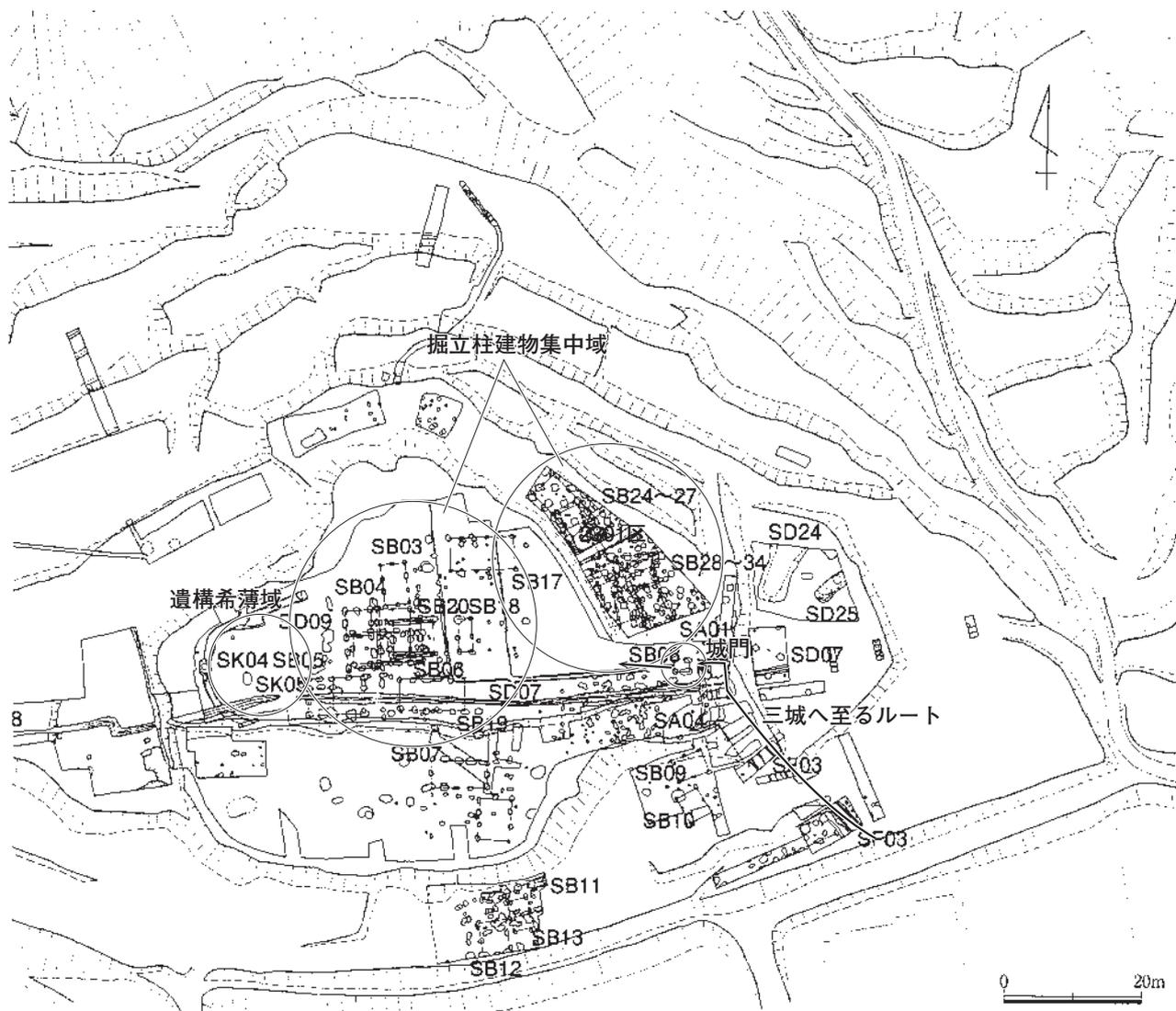


図24 三城周辺遺構配置図 (1/1,000)

比高差も約2～3mとさほど高いものではない。

一方、千畳敷では、曲輪を圍繞する横堀S D02や放射状に配置された大規模な縦堀（S D19、S D22など）が存在するだけでなく、千畳敷とその直下のS D02堀底との比高差は5mを超えており（未完成部分の北側を除く）、最も比高差がある地点では8mを超えるなど防御性に優れている。普請に伴う労働力は三城よりもはるかに大きいことが明らかであり、掘立柱建物跡の重複も著しく遺構密度も極めて高い。千畳敷と三城の利用のされ方や性格の違いが曲輪の造作の差異に反映しているとみられる<sup>2)</sup>。

## （2）三城及びその周辺の検出遺構と特徴について

次に三城及び周辺の検出遺構とその特徴についてふれてみたい。1次調査では、三城の広範囲にわたり発掘調査を実施し、4棟の掘立柱建物跡について報告しているが（宇土市教育委員会1977）、宇土城跡保存整備に伴う再検討で少なくとも10棟の建物が存在したことが明らかとなった。これらは全て掘立柱建物跡であり、このうちS B20は東西方向（桁側）に並行する2列の溝（幅約1m）を細長く掘り下げて柱を据えた後、柱の周りを土で埋め戻す、いわゆる「布掘り建物」であり、中世宇土城跡では唯一確認されている。

重複関係や建物主軸方向の相違などから推定される三城における掘立柱建物の変遷は、I期（S B19・S B21）→II期（S B06・S B18）→III期（S B03・S B17・S B22）→IV期（S B04・S B05・S B20）で、最も新しい段階のIV期（16世紀後半～末頃）をもって廃城となったとみられる<sup>3)</sup>。

また、掘立柱建物がI～IV期にわたって比較的長期間、恒常的な建物が存在したとみられるにもかかわらず、これらの建物群と三城西側のS D09との間の敷地は遺構をほとんど検出していないことは注目される。つまり、三城において一貫して空地地といえるような場所が存在していたことを示しており、ひとつの可能性として庭園的な空間の存在を指摘することができよう。三城西側の遠方には山姿が美しい白山（標高約218m）を眺望することができることから、白山を借景とした庭園的空間が存在したのかもしれない<sup>4)</sup>。

一方、三城を取り巻く帯曲輪では、三城東側で掘立柱建物跡が集中することが判明した（宇土市教育委員会2014）。計12棟の掘立柱建物跡を検出しており、これらの建物跡は柱穴の重複関係や建物の主軸方向の相違などから、I期（S B25〔S B24の可能性も有り〕）→II期（S B24〔S B25の可能性も有り〕・S B28）→III期（S B26・S B29）→IV期（S B27・S B30）→V期（S B31・S B32〔S B27と主軸が直角方向しており、S B27が同時併存した可能性有り〕）→VI期（S B33・S B34）→VII期（S B35）と少なくとも7時期にわたって存在したと想定される。三城の掘立柱建物群との対応関係は判然としないが、建替えを繰り返して長期間にわたって当地に建物が存在した可能性が高い。また、城門跡S B08や道路状遺構S F03も三城東側に位置している。一方、三城東側の帯曲輪以外では遺構密度が比較的低いか希薄であり、総じて東側から西側に向かうにつれて遺構が少なくなる傾向を把握することができた。

その要因として、領主や家臣団の屋敷地が存在したと想定される西岡台南側から三城へ入るためには、三城南側の道路状遺構S F03を通行し、門跡S B08を経て三城へと至るルートが想定されることから、実質的にS B08周辺は三城の虎口に相当する空間であることを指摘できる。その北側に隣接する21次調査区周辺は、三城の防衛上、重要な場所であることは明らかであり、城の機能を支える何らかの建物（施設）が恒常的にこの付近に存在したとみてよいだろう。

## 註

- 1) 三城西側周縁部は遺構が確認されていないことから、この部分にかつて土塁が存在した可能性がある。S D09は、この土塁とセット関係にあると想定され、導水状遺構西側に並走する形で土塁が配置されたとみられる。S D09は、その配置状況から三城中心部から西側へ向かって流れてくる雨水と、土塁の水受けのために設けられた可能性がある。
- 2) 千畳敷周辺の調査では、儀式や饗応などの非日常の場で使われることが多い土師質土器の坏（かわらけ）が大量に出土し、出土遺物の9割以上を占める。一方、三城では、かわらけの出土量が少なく、千畳敷ほどの高い割合ではない。千畳敷と三城の使われ方や機能の違いを反映している可能性がある。
- 3) 平成22・23年度に実施した三城の掘立柱建物跡遺構表示（平面表示）は、Ⅳ期を対象とした。
- 4) 宇土城跡保存整備検討委員会委員の稲葉継陽氏の御指摘による。

## 引用・参考文献

- 宇土市教育委員会 1977『宇土城跡（西岡台）』本文編 宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集  
 1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集  
 2007『宇土城跡（西岡台）』Ⅸ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第29集  
 2009『宇土城跡（西岡台）』Ⅹ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第31集  
 2012『宇土城跡（西岡台）』Ⅺ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第33集  
 2014『宇土城跡（西岡台）』Ⅻ 宇土市埋蔵文化財調査報告書第34集

# 図 版

## P L A T E S

図版 1 ~ 5 : 第22次発掘調査

図版 6 ~ 8 : 第23次発掘調査

図版 9 ~ 11 : 第24次発掘調査

図版 12 ~ 16 : 第25次発掘調査



2202区調査前状況（東より）



2201区遺構検出状況（東より）

図版 2



2202区遺構検出状況（西より）



2202区遺構検出状況（東より）



2202区南側矢穴痕が残る  
安山岩（西より）



2203-2区検出 1号石垣  
（南より）



2203-2区検出 1号石垣  
（北より）

図版 4



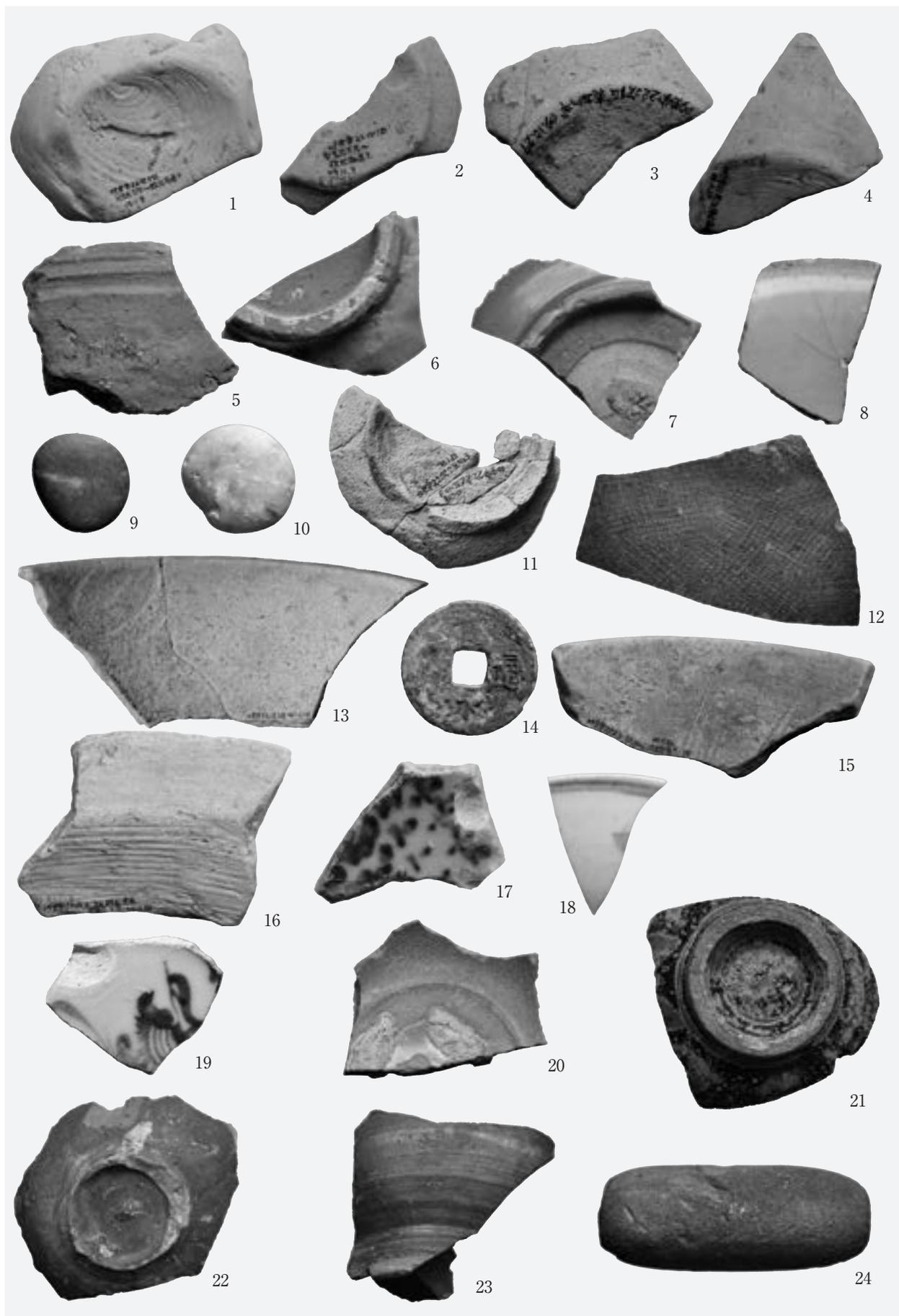
2203-2区検出矢穴痕がある石垣石材（西より）



2203-1区調査状況  
（南より）



2203-1区検出2号石垣  
（北より）



22次調査出土遺物

図版 6



23次調査前状況（東より）



2301・2302区調査状況（南東より）



2303区南側調査状況  
(南東より)



2303区北側調査状況  
(南より)



2303区北端検出石垣  
(北より)

図版 8



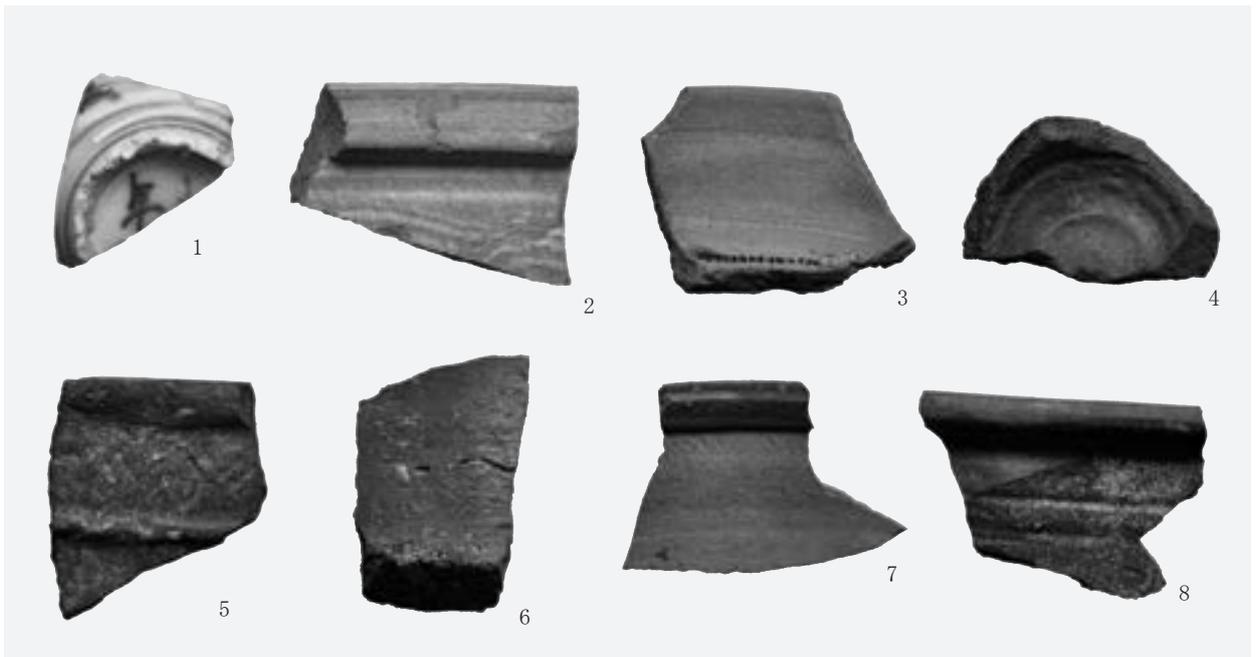
2302区調査状況（西より）



S K11調査状況（西より）



2301区西側遺構検出状況（南より）



23次調査出土遺物



2401区調査状況（南西より）



2401区調査状況（西より）

図版 10



S D24検出状況 (南より)



S D24検出状況 (北より)



S D25検出状況  
(北東より)



S D 25土層断面  
(南西より)



24次調査出土遺物



2502区 S F 03検出状況  
(南より)



2501区 S F 03検出状況  
(南より)



2501区調査状況（西より）



2501区調査状況  
（北東より）



2501区調査状況（北より）

図版 14



S A04検出状況（北より）



S A04検出状況（南より）



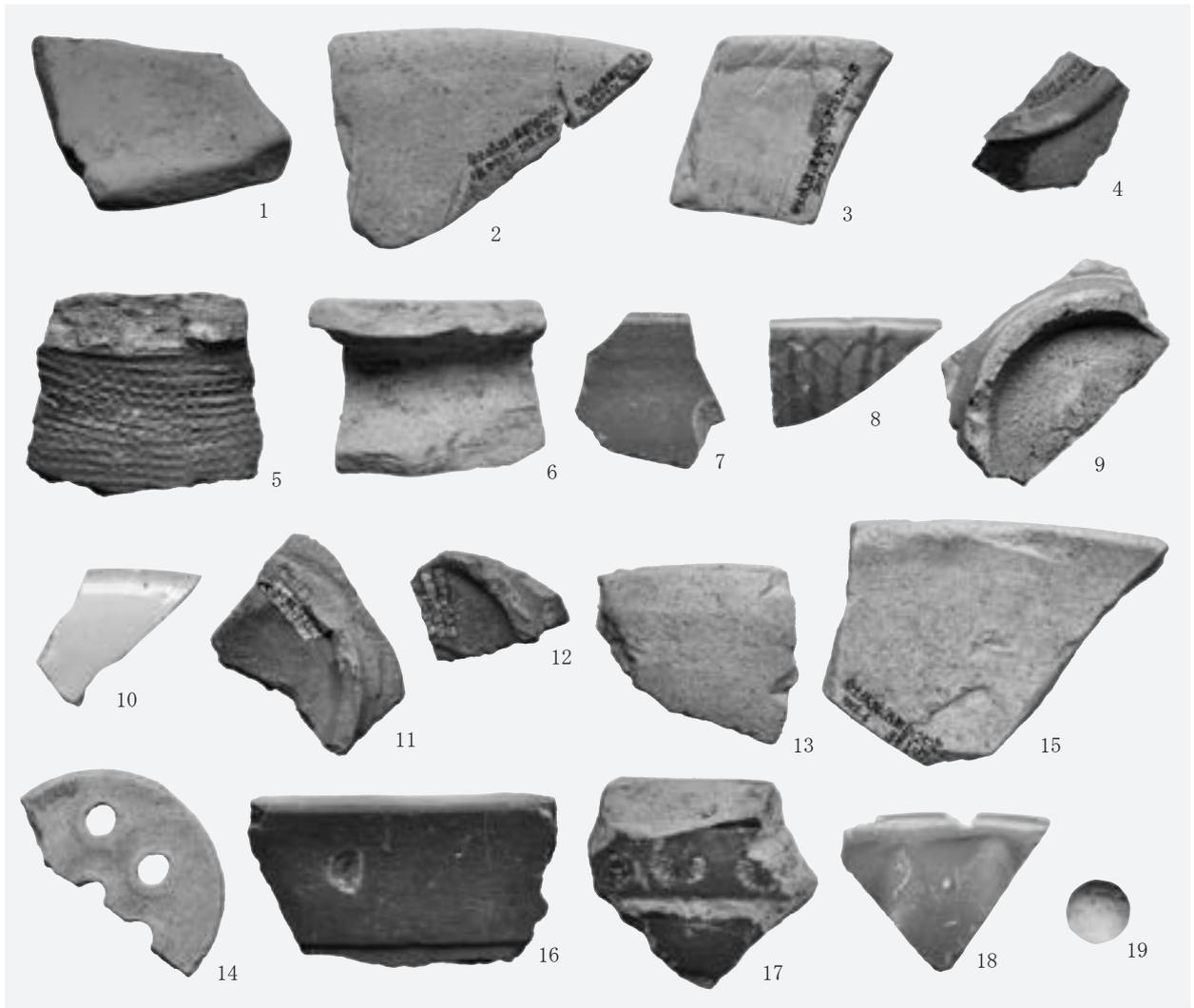
2503区 S F 03検出状況 (南より)

S A 01検出状況 (北より)



2504区調査状況  
(南より)

図版 16



25次調査出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと（にしおかだい）							
書名	宇土城跡（西岡台）XIII							
副書名	史跡整備事業に伴う平成21～24年度（第22～25次）発掘調査報告書							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第35集							
編著者名	藤本 貴仁							
編集機関	宇土市教育委員会							
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2015年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 回数	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
うとじょうあと 宇土城跡	くまもとけんうとし 熊本県宇土市 しんめまちあざさんのじょう 神馬町字三城	43211		32° 40' 40"	130° 38' 34"	22次 23次 24次 25次	158㎡ 101㎡ 140㎡ 160㎡	史跡整備事業に伴う保存目的の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
宇土城跡	中世城	中世	溝跡・道路状遺構・ 柵列跡・土坑		土師質土器・瓦質土器・中国製陶磁器（白磁・青磁・染付など）・滑石製石鍋・碁石状石製品・古銭・肥前系陶磁器			
特記事項								
<p>【22次調査】 灰白色と灰黒色の碁石状石製品が出土。廃城後に構築されたとみられる石垣（一部に小型の矢穴痕あり）を検出。</p> <p>【23次調査】 安山岩の巨石が抜きとられた痕跡（SK11）を確認。隣接地に所在する近世初頭とみられる矢穴痕が残る巨石と関連か。矢穴痕の大きさから、近世宇土城の石垣用石材として採取しようとした可能性。</p> <p>【24次調査】 三城東側帯曲輪で比較的大型の溝跡SD24を検出。おはじきもしくは碁石として使用されたとみられる円盤状陶製品が出土。</p> <p>【25次調査】 三城へと至る道路状遺構SF03を検出。1次・19次調査検出範囲とあわせ、三城東側城門跡SB08より約30mまでの規模や形状を把握。SB08南側で城門に伴うとみられる柵列跡SA04を検出。</p>								

## 宇土城跡（西岡台）XIII

－ 史跡整備事業に伴う平成21～24年度（第22～25次）発掘調査報告書－

### 宇土市埋蔵文化財調査報告書 第35集

発行年月日 2015年3月25日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会  
〒869-0433 宇土市新小路町95  
TEL 0964-22-6500(代) FAX 0964-58-1005

印刷 シモダ印刷株式会社  
〒869-0562 熊本県宇城市不知火町長崎240-1  
TEL 0964-32-3131 FAX 0964-33-1598